

令和6年度初等中等教職員 国際交流事業実施報告書

2024-2025 International Exchange Programme
for Primary and Secondary School Teachers Programme Report



ACCUCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

文部科学省委託 令和6年度 新時代の教育のための国際協働プログラム
2024-2025 International Coordination Programme for Education in a New Age entrusted by the Ministry of Education,
Culture, Sports, Science and Technology of Japan (MEXT)

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（以下 ACCU）では、25年にわたり日本、韓国、中国、タイ、インドの教職員を対象とした「教職員国際交流事業」を実施してまいりました。本事業を企画・運営する過程では、国内外の教職員、専門家、協力機関関係者などあらゆる立場の方々との対話や交流、議論を重ね、「今求められる教職員国際交流」を常に模索し続けています。令和6年度の事業からは、参加者のフォローアップや、中長期的な視点での調査分析により一層力を注いでいます。このような当センターにおける取組を重ねていくことで、過去のプログラムにご参加・ご協力いただいた皆様、そしてこれから本事業に関わる教育関係者にとって、より良い交流プログラムの創出につなげていきたいと考えております。

現在、教職員を対象とした学びの場やプラットフォームは多数存在しています。その中で、私たち ACCU が展開する教職員国際交流事業は、他者や異文化との「出会い」と「対話」をベースに、先生方が多様なアクターと協創し、Change Makersとして活躍する端緒を開くことを目指しています。教職員の皆様におかれましては、海外教職員との交流に強い関心をお持ちの方もいれば、「国際交流」という言葉に対して、言語の壁などに不安を感じている方や、興味を持っていない方もいると思います。どのような考え方であったとしても、本報告書が本事業や国際交流に対する皆様の関心を高め、新たな挑戦へのきっかけとなることを願っております。

最後に、本事業の実施にあたり多大なるご支援とご協力をいただきました関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

令和7年3月
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
国際教育交流部

目次

■ はじめに	1
01 事業の目的やねらい	3
02 令和6年度参加者の多様性（地域と校種）	7
03 企画から実施までのプロセス	9
04 プログラム参加後の取組	11
05 日韓教職員対談 『日韓教職員の出会いからつながる2つの小学校』	13
06 令和6年度事業の評価	15
07 資料編	23
08 協力機関・関係者紹介	31

事業の目的やねらい

事業概要 ACCUでは2001年からユネスコ(UNESCO)や国際連合大学(UNU)の事業として教職員国際交流事業を実施してまいりました。2018年度からは文部科学省の事業として引き継がれ、25年以上途切れることなく続いています。国内外の「教職員」を対象とした本事業は、2001年から韓国、2002年から中国、2015年からタイ、2016年からはインドが加わり、現在4ヶ国と連携し、東アジアから東南アジア、南アジアに交流国を広げています。

ACCUが実施する「教職員国際交流事業」の特徴とは？

本事業は、授業計画や教育実践のスキルを習得するための「研修」ではなく、「交流」を軸に教育や文化に触れ、これからの学びの在り方を問い直し、協創する機会へとつながる「教職員」のための国際交流プログラムです。ACCUが実施する本事業の特徴は大きく分けて3つあります。



① ユネスコの理念に基づく実施運営

ACCUでは、「多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に貢献すること」をビジョンに掲げ、本事業を実施しています。このビジョンとユネスコの理念について、韓国・中国・タイ・インドのカウンターパートと共通認識をもち、プログラムの企画・運営を進めています。

② 共通課題について教職員が「共に」考え向き合うプログラム

日々の教育活動の中で先生方一人ひとりが抱える悩みや課題を国内外の教職員同士で共有することにより、それを乗り越えるためのアイデアや自分のコンテキストでは発見できなかった新たな学びを創造することができます。

③ 持続可能なネットワークの構築

国内の教職員同士、さらには海外の教職員とのネットワークを構築することができます。本事業をきっかけに生まれた「出会い」や「つながり」から、学校間国際交流へと発展するケースも多数あります。



ACCUのビジョン：多様な文化が尊重される、平和で持続可能な社会の実現へ貢献

新時代の教育のための国際協働プログラム（初等中等教職員国際交流事業）で目指すこと

「教職員」が教育現場で国際交流を推進する
「教職員」が自己相対化する
「教職員」がChange Makersとして社会で活躍する



図1 本事業の全体像 ©2025 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

ACCUが実施する事業の独自性を基盤に、令和6年度は次の3つの目的を掲げ、プログラムの企画・運営を行いました(図1参照)。

① 「教職員」が教育現場で国際交流を推進すること

② 国内外の多様な人々や文化に触れて「教職員」が自己相対化を図ること

③ 「教職員」がChange Makersとして社会で活躍すること

予測困難な時代を生きる中で、教育現場を取り巻く状況は絶えず変化しており、「変化」に対応する学校教育や教職員の在り方を再考する(問い直す)ことは喫緊の課題となっています。これからの時代に必要な「学び」や「教職員像」について答えを導くことは容易ではありませんが、未来を担う子どもたちを導く存在である「教職員」が学校内外の人々との対話・交流を深め「今必要な学び」を問い続けることは非常に重要であると考えます。そこで、今年度の事業では、『「あたらしい」学び』と「新時代に求められる教職員像」について考えることをテーマに掲げ教職員国際交流プログラムを実施しました。

プログラム期間中は、オンラインと対面の両形式で「しる」、「みる」、「つなげる」に関連する交流や活動を行いました。約1週間にわたる対面プログラム終了後は、参加者が得た学びや知見、教職員同士のネットワークをもとに、各国の先生方が「アクションプラン」を作成し(「つくる」が指す活動)、その「アクションプラン」にむけて各地で様々な取組を進めています。各プログラムは二国間交流が基本となりますが、「アクションプラン」ではプログラムの垣根を越え、5ヶ国の参加者がお互いに成果や知見を共有できるようにしています。「アクションプラン」の内容は、訪問した国の学校との交流や、地域での国際交流イベントの開催など多岐にわたります。

また、今年度からは経年分析やプログラム終了後のフォローアップに一層力を入れて取り組んでいます。プログラム前・中・後の参加者の意識の変化や教育現場での国際交流、Change Makersとしての学校内外での取組などを中長期的に追跡し、明らかになった点を今後のプログラムの質向上のために活用していきます。また、参加者による事後の実践を幅広く発信し、事業の成果普及と教職員交流の輪を参加者以外にも大きく広げます。

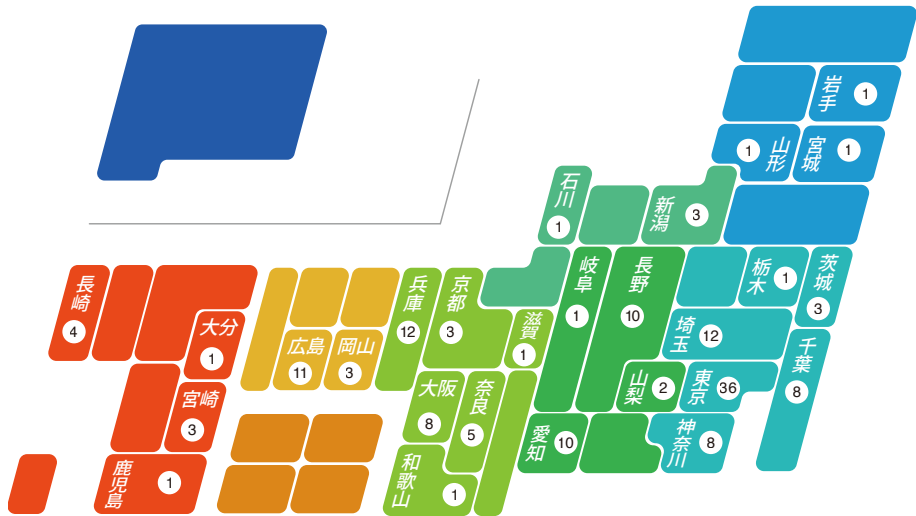
事業全体像と参加者の取組

水色の丸はプログラム期間中の活動内容（一部）、緑色の丸にはプログラム参加後の先生方の取組（一例）が書かれています。各地での交流が、教育現場及び地域での国際交流、そして教職員自身の変容へとつながっています。



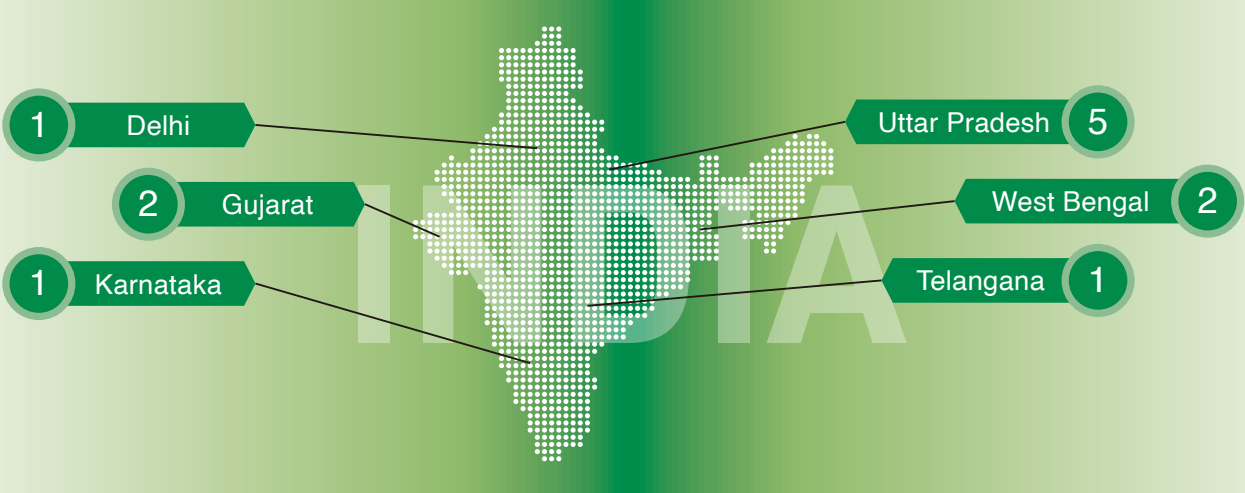
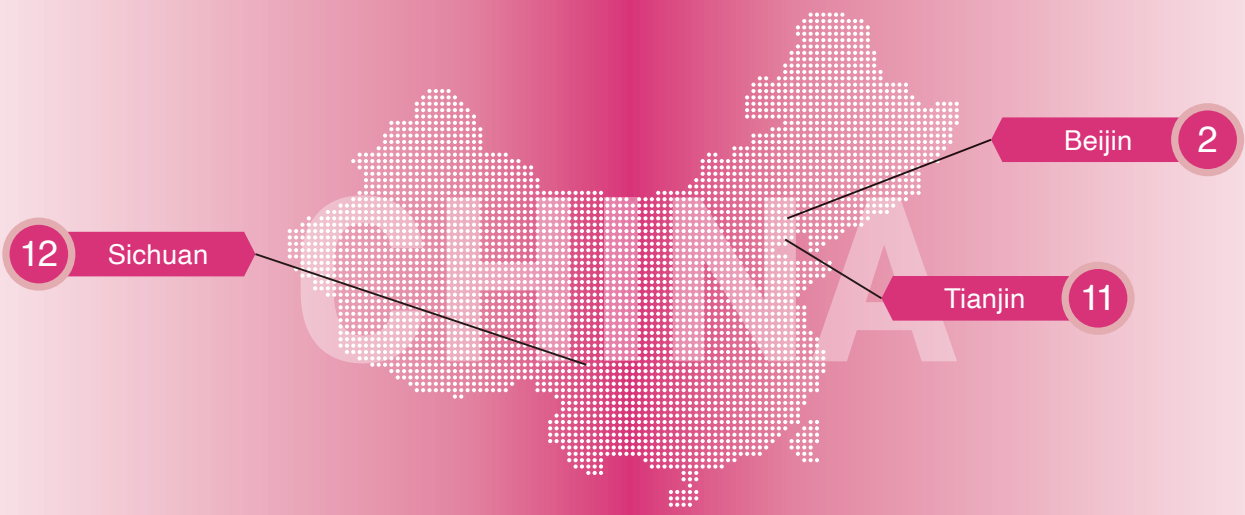
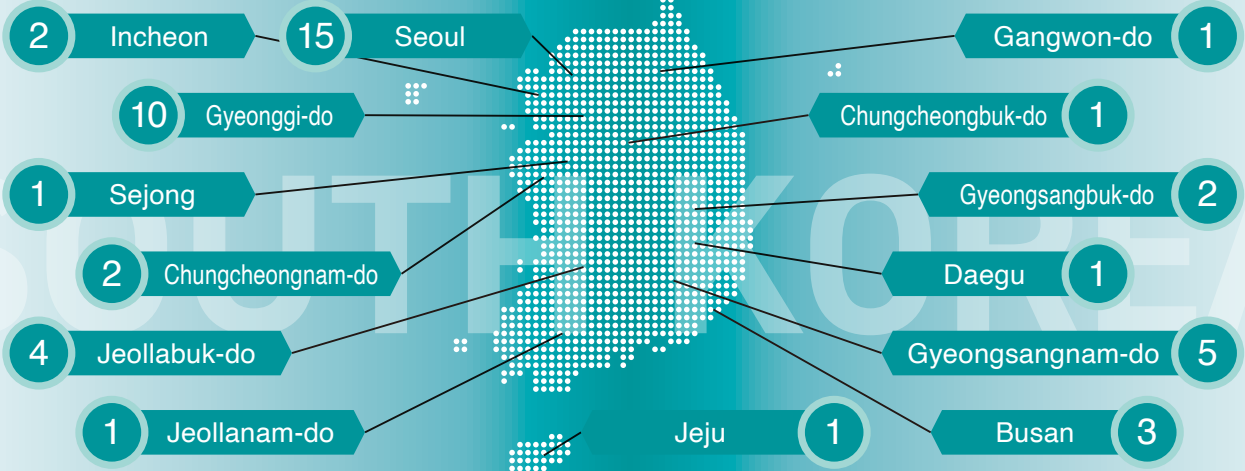
令和 6 年度参加者の多様性（地域と校種）

ACCUでは、参加者の担当教科や役職、校種、生活する地域を限定せず、多様なバックグラウンドをもつ教職員を対象にプログラムを実施しています。これはACCUが実施するプログラムの特徴の一つであり、国内外問わず幅広いネットワーク構築へとつながるプラットフォームとしても機能しています。今年度は派遣プログラムに参加した日本教職員は76名、招へいプログラムに参加した海外教職員は98名、招へいプログラムの交流会に参加した日本教職員は75名でした。このページでは、令和6年度において4つの交流国（韓国、中国、タイ、インド）及び日本の様々な地域や校種から本プログラムに参加した多様な属性の分布を地図等で示しています。



	小学校	中学校	中等教育学校	高等学校	中等職業学校	特別支援学校	その他
韓国 韓国の先生	10	8	0	24	0	2	5
韓国 日本の先生	6	10	0	9	2	4	1
中国 韓国の先生	5	6	0	7	1	0	6
中国 日本の先生	8	1	3	3	2	2	0
タイ 韓国の先生	1	2	0	6	0	0	3
タイ 日本の先生	6	1	0	0	4	1	0
インド 韓国の先生	1	1	0	7	0	0	3
インド 日本の先生	5	2	0	4	0	1	0
合計	42	31	3	60	9	10	18

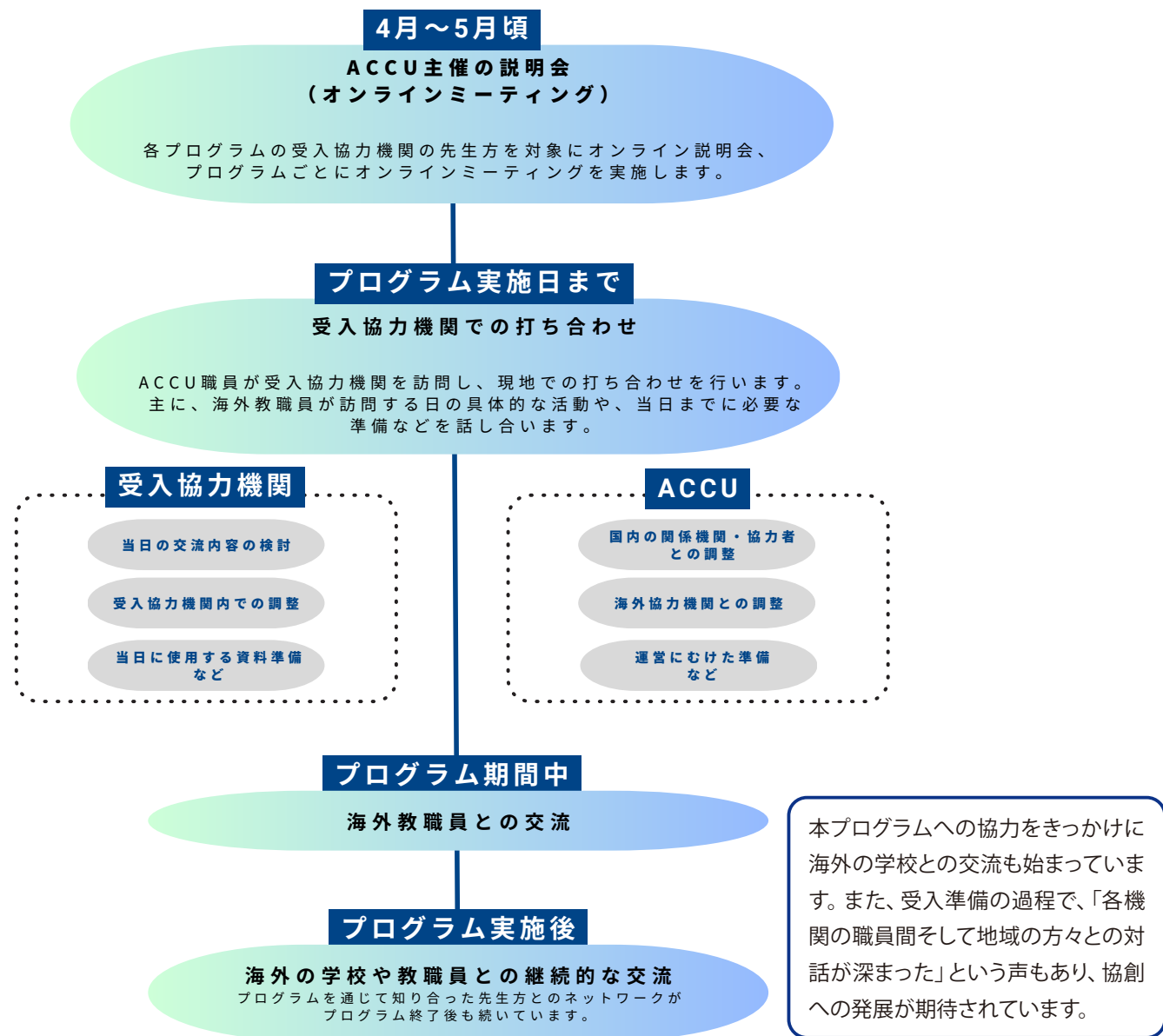
※派遣プログラムは、参加した日本教職員の人数を反映しています。



03

企画から実施までのプロセス

ACCUのプログラムでは、日本各地の教育機関に海外教職員の受入れをお願いしています。受入希望調査を経て決定した受入協力機関との連携を土台に、例年様々な活動を展開しています。プログラム実施までの大まかな流れは以下の通りです。※ 以下の内容は状況に応じて変更の可能性あり



受入協力機関・プログラム協力者の方からいただいたコメント

【インド教職員招へいプログラム】

久喜市立久喜東小学校：

教職人生において、まさに一生に一度あるかないかの貴重な機会に携われたことを、大変光栄に思います。インドの先生方から伺った貴重なお話は、非常に刺激的であり、多くの学びを得ることができました。今後も同じ教育者として、互いに切磋琢磨し、高め合っていければと考えております。

学校法人東京内野学園東京ゆりかご幼稚園：

インドの先生方とヨガやダンスを楽しんだことは、子どもたちの記憶にも強く残っており、このような交流を継続的に行うことができたと考えております。また、インドの先生方と交流後、インドのマジシャンによるマジック体験や、インドで生活している方からインドの野菜をご紹介いただく等、インドについて学ぶ機会が増えた1年となりました。実体験と日常的に（図鑑などで）興味のあることを調べる体験がリンクしていくと深い学びにつながることも実感しています。今後もこのような交流の機会をつくり、インドをはじめ、様々な国や文化等に触れる経験も保育に積極的に取り入れていきたいです。

埼玉県立越谷北高等学校：

インドの先生方と積極的にコミュニケーションをとろうとする生徒の姿から、実際にFace-to-Faceで交流することの素晴らしさを改めて実感しました。今回の交流は生徒自身の学びの意欲をさらに高める良いきっかけになったと感じています。教職員交流の時間には、インドの学校事情や教職員の立場などをインドの先生方が詳しく説明してくださり、教職員にとっても学びの多い機会となりました。

【タイ教職員招へいプログラム】

呉市立仁方中学校：

本校には、タイ国籍・中国国籍・ブラジル国籍の生徒が在籍していますが、国際交流や多文化共生などについての活動や学習は行っていませんでした。その理由として、外国籍の生徒であっても、日常会話は日本語であることや異文化理解を必要とする場面がなかったことが挙げられます。しかし、今回初めてタイの先生方に来ていただき、大変優しく生徒と交流していただいたため、生徒の緊張感も解けて、大変楽しい交流となりました。今回の訪問により、生徒たちはタイという国や外国に対しての興味・関心が高まったように見られました。国際交流はハードルが高いように感じていますが、一度何らかの形でやってみれば、大変面白く教育効果が高いと思うようになりました。

広島県福山市立蔵王小学校：

交流の中で最も強く感じたことは、タイの方々がとても温かで自然なやさしさをもって私たちと交流してくださったことです。そのため、どの学年の子どもたちも、授業の中だけでなく、休憩時間もタイの方々と一緒に遊びたい、いろいろなお話をしたいと誘い、とても自然な交流ができました。今回、ねらいとしていた、「自然な形での交流ができるように」との思いを、実現してくださったと思います。

広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 牧 貴愛 先生：

笑顔溢れる日本とタイの先生方の交流会になったこと、それを支えるユネスコ・アジア文化センターの方々のきめ細やかなサポート、配慮が強く印象に残っています。指導学生にとってラジオ体操、東広島音頭、とくにキャンパスオリエンテーリングは新しい活動で、帰国後に、自らの勤務先（教員養成校など）の課外活動などに採り入れることができるものでした。また、キャンパスオリエンテーリングを、指導学生に任せて頂いたことで、企画運営の経験を積み、終了後は達成感が得られたと思います。タイ、日本の学校の先生方と知り合うことができたことや、今回の交流会の入念な準備、段取り、ラジオ体操によるアイスブレイク、ワークショップの進め方などなどユネスコ・アジア文化センターの方々から学んだことが多くありました。

【中国教職員招へいプログラム】

八潮市立八條中学校：

教育相談や生徒指導、特別支援教育や保護者対応等について、教職員として抱える課題や悩みは同様であること、その共有・共感ができたことが、一教師として非常に良かったと感じています。一方で、ICT環境や学力向上に資する取組等、本校（日本）とは異なる状況や考え方の一端について知ることができたことは、大きな収穫であったと考えています。

神栖市立息栖小学校：

中国の歴史・文化・言語・教育等について、これまで以上に興味・関心を抱く教職員や児童が増えました。交流後の道徳の授業で、「国際理解」についての授業を行った際、中国の先生方から教えていただいた中国の文化と日本の文化の違いについて触れながら、「文化に違いはあるけれど、どちらにもよいところがあるね。」と児童から意見が出ました。また、教職員交流会で中国の先生方から質問を受けたことは、日本や本校の教育システムなどを改めて考えるよい機会となりました。

【韓国教職員招へいプログラム】

王寺町立王寺北義務教育学校：

今回の訪問は、私たち教職員にとって、異文化理解を深める貴重な機会となりました。韓国の先生方の熱心な姿勢に触れることで、我々も視野が広がり、今後の教育活動に活かせるヒントをたくさん得ることができました。子どもたちにとっても、韓国の先生方との交流は、国際感覚を養う上で非常に有意義な経験になったと感じています。日韓の教育関係者同士の交流は、両国の教育発展に貢献できると確信しています。

神戸市立神港橋高等学校：

本校教員と訪問団の先生方との意見交換は互いの教育に対する思い、課題などを共有することができた点が特に印象的でした。隣国でありながら文化の違いを感じ、勝手な偏見を持っていた生徒もいました。しかし、訪問された先生方が熱心に交流を深めてくださったことで、ネット等のメディアを通じてしか知りえない限られた情報ではなく、授業や対話を通じて、「もっと知りたい。」や、「行ってみたい。」「今後も交流をしてみたい。」というように変化が見られました。

プログラム参加後の取組

各プログラムにおける「出会い」や経験が、各地での様々な国際交流や教育実践へと展開しています。ここでは、令和5年度、及び令和6年度に実施されたプログラム参加者のその後の取組を一部ご紹介します。

開智中学・高等学校

三原 忠 先生

令和6年度の韓国政府日本教職員招へいプログラム（韓国派遣プログラム）で訪問した韓国慶尚南道にあるチルウォン高校と姉妹校提携を締結しました。年末年始には本校の生徒数名とともにチルウォン高校を再訪し、日韓それぞれのSDGs活動・探究活動についての発表と伝統工芸（岩槻木目込人形）制作体験や韓国の伝統的な遊び体験を行いました。単なる観光だけではなく、文化交流、授業参加、ホームステイなどを通して、生徒も教員も一生のバディができるようなワクワクする交換交流プログラムを令和7年度からスタートします。

東京都立小平特別支援学校武蔵分教室

阪口 菜津子 先生

令和6年度の韓国派遣プログラムで訪問した釜山ソウル学校の生徒さんと、小平特別支援学校中学部の生徒でオンライン交流会を実施しました。交流会では参加した子どもたちでダンスを踊ったり、クイズを出し合ったりしてお互いに関心をもちながら、楽しい時間を過ごすことができました。

長野県長野盲学校

丸山 妙子 先生

令和6年度の韓国派遣プログラムへの参加をきっかけにつながったご縁から、ソウル盲学校とのオンライン交流を始めました。オンライン交流では、自己紹介や学校紹介、箏の説明や演奏披露など様々な活動を行いました。2025年1月には本校職員数名で、実際にソウル盲学校を訪問し、学校の施設や教育活動の見学、教職員同士での意見交換等を行いました。今後も児童生徒間の交流のみにとどまらず、教職員間の交流も活発に進めていきたいです。

長崎市立土井首中学校

石隈 亮子 先生

令和6年度のタイ教職員招へいプログラムの一環で、広島大学で開催された日タイ教育交流会にて知り合ったタイのEiw先生のシリントーン高校1年生と土井首中学校1年生がグリーティングカードの交換をしました。「生徒が相手を意識してコミュニケーションをとれたこと」「タイと日本の文化を学び、関心が高まったこと」「英語を使う意欲が高まったこと」という点で成果があったそうです。一方で、「もっと振り返りを充実させること」「継続的・発展的な交流の仕組みを作ること」「カード交換以外の交流方法にも挑戦する」といった課題も見つかったようです。

立川市立第八小学校

田部井 淳 先生

日印教職員交流会で知り合ったMeenakshi Khushu先生の学校（Shree Vasishta Vidhyalaya）とオンライン交流をしています。2025年2月には、本校5年生とインドの学校の子どもたちが、それぞれの国の伝統的なあそびを紹介しました。日本の子どもたちからは、こまやけん玉等を紹介し、実演してあそび方を伝えました。インドの子どもたちからは、インドのあそびとともにヨガを教わり、日本側で再現に苦戦するポーズもありましたが終始楽しく交流ができました。このような交流を今後も継続して行い、子どもたちの異文化理解や異文化コミュニケーションにつなげていきたいと考えています。



日本の子どもたちがインドの子どもたちに手を振る様子
（日印オンライン学校間交流）

岡山市立操南中学校

竹島 潤 先生

令和5年度のタイ政府日本教職員招へいプログラム（タイ派遣プログラム）をきっかけに、北海道置戸高等学校（同プログラム参加者所属機関）、ナコーンラーチャシーマー県ソンナン学校と本校で交流を進めています。タイから帰国後、各校生徒たちがオンラインで自分たちの学校紹介をするといった活動を展開し、令和6年には3校教育交流協定を締結しました。今年の1月にはオンライン3校教育交流協定プレ1周年記念事業を開催し、今後も継続的に交流を進めていく予定です。



日タイ3校教育交流協定プレ1周年記念事業 集合写真

Kanlayanawat School

マカポン・ガーンブルー 先生

令和6年度のタイ教職員招へいプログラムに参加後、勤務校で日本での経験に基づいた展示をし、タイ教育省の審査で高評価を得て1位となりました。展示は、日本のアニメ「ガンダム」や11月10日に訪れた広島平和記念資料館からインスピレーションを得たフィギュアや模型を、再生紙をつかって制作したものです。また、蔵王小学校と年賀状交換し、学校同士の取組に留まらず、将来子どもたち同士の交流へ発展することを期待しているそうです。



タイの学校における国際理解教育につながる展示

愛知県立大府高等学校

野々山 新 先生

令和6年度タイ政府日本教職員招へいプログラムで得た知見を活用し、早速勤務校の高校2年生（3組と4組）の世界史の特別授業として生徒に還元しました。野々山新先生は、勤務校における主体的で対話的な授業推進のトップリーダーで、県内外からの授業視察の実績も複数ある先生です。「タイから学ぶ多文化共生」という切り口から、生徒の世界史の探究活動に結びつけた取組は、2025年3月に4回にわたり、①導入・テーマ決め②調べ活動③調べ活動・まとめ④発表・リフレクションの内容で構成されています。導入部分では、タイへの関心を喚起するような学習教材を基に（先生がタイで朝のジョギングの合間に撮った写真、タイの食べ物、タイの各時代を象徴し、且つ特徴的な仏像の写真、同世代のタイの子どもの写真など、クラスの生徒が興味を持ちそうな写真を随所随所に挿入している）、生徒への投げかけ（常に問いを投げかけ、生徒から引き出す）による先生と生徒、生徒同士の対話形式で進められました。教科書や資料集にある地歴情報に加えて、先生がみたタイの文化や街、学校の様子が伝わり、生徒がどのようにタイを捉え、理解を深めていくか楽しみです。



「タイから学ぶ多文化共生」の授業（探究活動）の様子

【参加者のアクションプラン】

令和6年度は、プログラム実施後に各参加者が「アクションプラン」を作成しました。先生方の「交流」から得た気づきや今後のビジョンを、ACCUウェブサイトからぜひご覧ください！



https://www.accu.or.jp/teachers_action_plan/

日韓教職員対談 ― 日韓教職員の出会いからつながる2つの小学校 ―

今回は令和5年度と令和6年度に行われたプログラムの参加者であるパク・ジュヒ校長先生と石橋佳奈先生による対談を実施しました。お二人は、2024年7月に韓国で開催された韓国政府日本教職員招へいプログラム（韓国派遣プログラム）で出会い、学校間交流が進められています。対談では、お二人がプログラムにご参加されたことをきっかけに今行っている学校間交流のことをお話いただきました。



**韓国ヨンナム小学校
校長
パク・ジュヒ 先生**

令和5年度
韓国教職員
招へいプログラムに参加

パク先生が考える国際交流の意義

学校教育において、国際交流は地球市民教育を実践する方法です。教職員は国際交流によって異なる文化と新しい教育方法に触れ、多様かつ新しい視点から問題を捉えることができるようになります。また、地球市民教育の一環としてネットワークを拡大し、協働する機会を得ることも可能です。そして何よりも児童・生徒に、より広い世界を見せることのできる最良の機会が「国際交流」であると考えます。



石橋先生:パク校長先生が韓国教職員招へいプログラムにご参加されたきっかけは何ですか？

パク先生:このプログラムについては、当時所属していた前任校に届いた公文書を通じて知りました。私自身プログラムに参加するまで日本に行ったことはなかったのですが、日本の教育や文化に興味があり、校長として国際交流にも関心をもっていました。そして教育活動を通じて子どもたちに広い世界を見せたいという気持ちと、特に日本について知ってもらいたいという気持ちもあり、プログラムへの参加を決意しました。石橋先生はいかがですか？

石橋先生:韓国には今まで一度も行ったことがなかったのですが、ずっと韓国の文化に対する興味はありました。その中で韓国派遣プログラムについて知り、韓国に行って、韓国の教育現場や文化、先生たちや子どもたちの思いなどをたくさん吸収したいと思ったことをきっかけに参加しました。日本と韓国は隣国同士だからこそ、お互いにたくさんのことを知り合い、



**福山市立山手小学校
教諭
石橋 佳奈 先生**

令和6年度
韓国政府日本教職員
招へいプログラムに参加

石橋先生が考える国際交流の意義

「お互いの国の魅力を感じる輪」を広げることができるのは国際交流の良さだと考えます。私たち教職員は日々、たくさんの人々と関わり、教育活動を実践・展開することができる立場で、世界との架け橋としての役割が求められていると思います。教職員自身が、自分が住んでいる国だけではなく、世界各国の魅力に触れる手段はたくさんあると思いますが、教職員同士が国際交流をして、お互いの国・教育・文化・伝統など様々な分野に触れる中で理解を深め、両国の架け橋として自分自身にできることを実践し、発信していくことが大きな意味をもつと感じています。発信し始めたその時から、確実に一歩前進し、周囲の人の意識・気持ちも少しずつ変わっていきます。やがて今度は、周りの人が別の人に発信するきっかけにもなります。このように、国際理解教育の輪が広がるのではないのでしょうか。

お互いの教育現場で生かすことが大切であると考えたことも参加動機の一つです。

石橋先生:パク校長先生と7月に初めてお目にかかった時のことを、今でも鮮明に覚えています。韓国派遣プログラム期間中に釜山で開催された日韓教職員の共同活動で、たまたま私の隣の席がパク校長先生でした。韓国語が話せなくてとても緊張していたのですが、パク校長先生がスマホの翻訳アプリを使いながら、素敵な笑顔で優しく話しかけてくださり、リラックスして交流を楽しむことができました。

パク先生:石橋先生も私に温かく接してくださり、そのお人柄にとっても惹かれました。先生は好奇心に溢れていて、私からの質問に対しても誠実に答えてくださいました。その姿から、「この方はきっと良い先生だな」という印象を持ちました。

石橋先生:特に覚えているのは、共同活動終了後に「石橋先生と出会えてとても幸せです」と言ってくださったことです。私もパク校長先生に対して同じように思っていたのでとても嬉し

かったです。

パク先生:あの日をきっかけにオンラインでメッセージのやりとりを始めて、石橋先生がヨンナム小学校と山手小学校の交流をご提案くださいましたね。

石橋先生:韓国に行って、現地で先生方や子どもたちと直接話をして、とっても温かい気持ちになりました。この温かい気持ちを私だけではなく、帰国してから山手小学校の他の先生方や子どもたちにも伝えたいと思いました。そこで帰国後、所属校の校長先生と相談の上、ヨンナム小学校との交流についてパク校長先生に提案しました。

パク先生:ヨンナム小学校の先生方に山手小学校との国際交流について話をしたところ、「ぜひやりたいです!」という先生が出てきました。校長という立場としては、本校の先生方が国際交流に積極的な姿勢で取り組まれることが非常に嬉しかったです。日本の学校との交流のきっかけをくださった石橋先生には心から感謝しています。

石橋先生:パク校長先生の学校との交流を開始した当初、山手小学校は「We love Korea」、ヨンナム小学校は「We love Japan」というテーマを掲げ、お互いの国の好きなところを子どもたちが伝え合いました。お互いに言語の壁があったため、英語を使った動画を送り合う国際交流から始めることができ、とても良かったです。動画では、山手小学校の子どもたちが韓国の好きな食べ物やアイドルについて紹介しました。

パク先生:ヨンナム小学校にとって、山手小学校との交流は「初の国際交流」でした。こういった本校の状況や言語面での課題を踏まえ、動画を送り合う交流からスタートできたことはとても良かったです。ヨンナム小学校から山手小学校に送った動画は、本校の国際交流担当の先生が5年生の子どもたちとともにつくっていました。動画には、日本のアニメ主題歌をカリンバで演奏する様子や、日本で有名な曲にあわせて子どもたちが踊る動画などをお送りしました。

石橋先生:ヨンナム小学校から動画が届いた後、山手小学校の子どもたちからは、「ヨンナム小学校とずっと国際交流したい!」と言われるようになりました。この様子を見た周りの先生方から「同好会を作ったらどう?」というご提案があり、その後「ヨンナム・山手国際交流同好会」を立ち上げ、ヨンナム小学校にダンス動画も送りました。

パク先生・石橋先生からのメッセージ ～教職員国際交流プログラムへの参加を検討している先生方へ～

パク先生:将来開催されるプログラムへの参加を希望する皆さん!教職員国際交流は、多様な文化を理解し、大切な絆を紡ぐ第一歩です。オープンな心とチャレンジ精神で、より広い世界へ向かってください。皆さんの小さな一歩が、もう一つの世界と交流する大きなチャンスになります。新しい経験から、違いを超えて他の文化を尊重しながら学ぶとき、より美しい世界が生まれると思います。

石橋先生:海外や国際交流に興味がある理由はそれぞれだと思います。まずは、皆様の「好き」という気持ちや「興味・関心」そして「やってみたい」という思いを大事にしてほしいです。一歩目を踏み出すには、勇気や覚悟も必要だと思いますが、始めの一歩を踏み出すことができると、何かが変わっていき、目標に向かって前に進むことができます。そのチャレンジしていく過程で、色々な出会いがあり、視野も広がり、貴重な経験が日々の教育活動や人生につながっていくと思います。ご自身の中に秘めている情熱や思いを胸に、ぜひ一歩踏み出してみてください!

パク先生:そのような経緯で同好会ができたのですね。私の学校でも国際交流担当の先生方と議論して、山手小学校のように同好会を作ったり、より良い国際交流ができる方法を模索していきたいと思います。

石橋先生:他にも、地域の紹介動画を送り合いましたね。

パク先生:そうですね。山手小学校からは福山市を紹介する動画を送っていただきましたね。

石橋先生:ヨンナム小学校からもトンヨンの観光地などを紹介する素敵な動画を送ってください、とても嬉しかったです。ヨンナム小学校からいただいた写真は山手小学校の図書館に飾り、韓国の魅力を伝えるイベントを開催しました。

石橋先生:動画での交流は回数を重ねて続いています。山手小学校との国際交流を始めた当初と現在を比べて、ヨンナム小学校の先生方や子どもたちに変化はありましたか？

パク先生:はい、ありました。まず、学校の正式な校務として「国際交流」が加わりました。令和6年度までは有志の先生方による活動の一つとして進められていたので、これは学校にとって大きな変化でした。石橋先生からのお誘いによりこのような変化が生まれ、とても感謝しています。また、本校の子どもたちが日本文化に触れる中で国際交流に関心を持ったということも、学校としての変化であり私自身の喜びの一つでもあります。

石橋先生:山手小学校の子どもたちも、交流を通じて韓国や国際交流への興味関心が高まっています。

パク先生:そのようなお話を聞くことができとても嬉しいです。今後は国際交流を継続的に行っていき、この交流が山手小学校とヨンナム小学校の子どもたちが直接会うきっかけになればいいと思います。

石橋先生:私自身も、継続的にヨンナム小学校と山手小学校が交流できたら良いなと思っています。そして、今後は動画だけではなく、オンラインでのリアルタイム交流や対面交流など、何か別の形で交流できたら良いですね。

パク先生:リアルタイムでオンライン交流をして、その中で子どもたちがお互いにダンスや歌を披露する交流も面白そうです。

石橋先生:良いですね。持続可能な交流の進め方について、今後も一緒に考えていきましょう!



令和 6 年度事業の評価

本プログラムを実施する意義を改めて見つめ直し、参加者にとって有意義なプログラムを生み出せるよう、東洋大学社会学部教授の米原あき先生をプログラムアドバイザーとして迎え、プログラムの企画から調査・分析まで幅広くご協力いただきました。ここからは、米原先生による本事業の調査・分析に基づき、今年度のテーマについて参加者の先生方が考えたことや、アンケート調査から見た本事業の成果を示していきます。



プログラムアドバイザー
米原 あき 先生

東洋大学社会学部社会学科
教授

比較教育政策学、評価学、国際協力論、人間開発論、社会統計・調査を専門とし、SDGs や ESD など人間開発に関わる取組の評価研究を行う。日本評価学会副会長・事務局長、専門社会調査士。主著『SDGs 時代の評価：価値を引き出し、変容を促す営み』（筑波書房）等。

本事業の評価の枠組みとして、今年度からプログラム評価の手法を導入しました（山谷他 2020）。プログラム評価は、ニーズ評価、セオリー評価、プロセス評価、アウトカム評価、効率性評価の5つの領域から成る包括的な評価の方法で（図1）、「結果」だけを見る事後評価とは異なり、俯瞰的な視点から、プロセスをブラックボックス化させない評価を行うことができます。

プログラムのコストと効率性の評価

プログラムのアウトカム／インパクト評価

プログラムの実施プロセスの評価

プログラムのデザインとセオリーの評価

プログラムのニーズ評価

図1 プログラム評価の5領域

プログラム評価の特徴として、セオリー評価の段階でロジックモデルを策定することが挙げられます。本事業の場合、事業担当者と筆者との協働により、p.16にあるロジックモデルを策定しました。このロジックモデルに、この事業のビジョンと、そのビジョンを実現するための具体的な活動と、それらの成果を可視化するための指標が示されています。

対話や多様性を重視する教職員交流事業が なぜいま求められているのか

世界の各地域で、平和な社会を揺るがす出来事が多数発生しており、多様性を認め合い、対話を通じた平和な社会の実現に向けて、「人づくり」の長期的な取組が求められています。

その中で、教職員は重要なステイクホルダーであると言えます。特に初等・中等教育に携わる教職員は、子どもたち・保護者・地域住民を繋ぎ、対話をすすめることができる、その地域のハブとしての立場にもいるためです。

一方で、学校教職員は同質的な環境で時間を過ごし、多様な人々と出会う機会が少ない傾向にあります。本交流事業を通じた多様性との出会いや対話の経験は、教育現場における多様性理解へのヒントとなり、教職員を Change Makers へと涵養する機会を提供します。



本事業のロジックモデル

長期
ビジ
ョン

スーパーゴール (ACCUの組織ミッション＝今後の事業全体におけるビジョン)

多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に貢献する

上位アウトカム (本事業が目指すビジョン)

- ・教職員が教育現場で国際交流を推進する
- ・教職員がグローバルな視点から自己相対化を図る
- ・**教職員がChange Makersとして活躍する**

中間アウトカム (本事業が目指す具体的なアウトカム＝Change Makersの資質)

- ①多様性に対する感度が養われる
- ②異文化や他者を理解し、深い対話ができる
- ➡本事業では、参加教職員の①②の資質を涵養するための機会も提供する

中期
事業
計画
(2024年)

活動 (本事業を構成する活動＝中間アウトカム①②を実現するための活動内容)

2024年度のテーマ：あたらしい学びと新時代に求められる教職員像を考える

「今はまだ存在しない」あたらしい学びや教職員の姿を、多様な視点と経験と悩みを持ちより共有することで創造していこう。

【目標：参加者に期待する変容】

- 1)異なる相手に対する関心が高まる ➡評価指標：アンケート質問7,8
- 2)異なる相手に対する知識が深まる ➡評価指標：アンケート質問9,10
- 3)国際交流や国際理解に対する関心が高まる ➡評価指標：アンケート質問11,12
- 4)日本教職員とのネットワークが広がる ➡評価指標：アンケート質問13①
- 5)自国教職員とのネットワークが広がる ➡評価指標：アンケート質問13②
- 6)このプログラムからの学びを自らの教育活動に活かせる ➡評価指標：アンケート質問13③
- 7)このプログラムからの学びを同僚と共有したいと思う ➡評価指標：アンケート質問13④
- 8)自ら国際交流プログラムを立案・推進したいと思う ➡評価指標：アンケート質問13⑤
- 9)「あたらしい学びと新時代に求められる教職員像」についてアイデアが協創される ➡記述

※ アンケート質問項目はp.22の【別紙】参照

このロジックモデルに則り、本事業では以下のように定量的なデータと定性的なデータの両方を用いた混合手法による評価を行いました。I～IIIに従って順次概説していきます。分析対象となったデータは、執筆時点ですべてのデータが揃っているインド及びタイからの招へいプログラム参加者24名（インド、タイそれぞれ12名ずつ）です。また、日本教職員の派遣プログラムについては、ホスト機関によってプログラム内容が大きく異なるため、分析の対象外としています。

I. アンケート調査による定量評価 II. 記述回答による定性評価 III. 総括

I. アンケート調査による定量評価

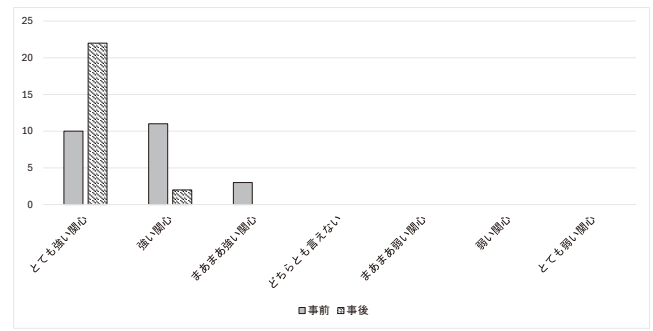
本プログラムでは、評価活動の一環として、プログラム終了時にアンケート調査を行いました（アンケート票は別紙〈p.22〉のとおり）。このアンケート票の中に、上記のロジックモデルの「活動」の中にある「目標」を評価するための質問項目が設定されており（質問7-13）、これらがこのプログラムの評価指標となっています。以下ではこれらの項目を統計的に分析した結果を考察していきます。

I-1. 関心や知識の高まり・深まり

下図は、それぞれ、①日本に対する関心、②日本の教育に関する知識、③国際交流や国際理解に対する関心が、プログラム前後でどのように変化したかを分析したものです。t 検定の結果、いずれも統計的に有意に上昇していることが明らかになり、このプログラムの成果を裏付けていることが分かります。

①日本に対する関心の変化（7件法）

【質問7-8】日本に対する関心

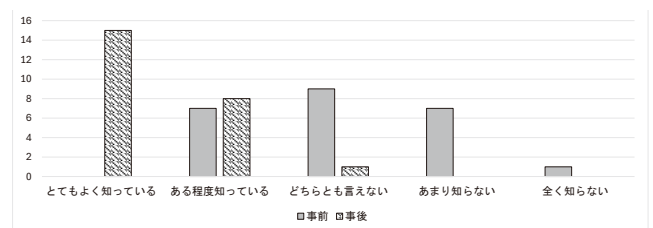


	事後	事前
平均 (変化量)	6.92	6.29
分散	0.63	
観測数	24.00	24.00
自由度	23.00	
t	4.73	
P(T<=t) 両側	0.00	

注) 対応サンプルの t 検定 Excel ver. 2412

②日本の教育に関する知識の変化（5件法）

【質問9-10】日本の教育に関する知識

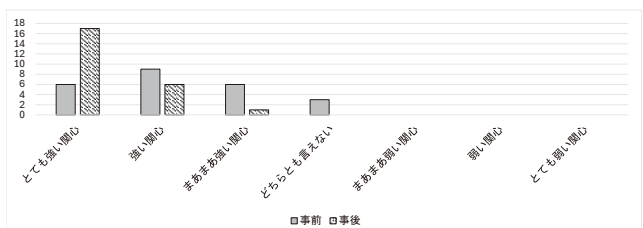


	事後	事前
平均 (変化量)	4.58	2.92
分散	0.34	0.78
観測数	24.00	24.00
自由度	23.00	
t	11.63	
P(T<=t) 両側	0.00	

注) 対応サンプルの t 検定 Excel ver. 2412

③国際交流や国際理解に対する関心の変化（7件法）

【質問11-12】国際交流や国際理解に対する関心



	事後	事前
平均 (変化量)	6.67	5.75
分散	0.92	
観測数	24.00	24.00
自由度	23.00	
t	6.26	
P(T<=t) 両側	0.00	

注) 対応サンプルの t 検定 Excel ver. 2412

以上の分析結果から、ロジックモデルの「活動」の中に明示されていた「目標」の1～3については達成されたと言えます。すなわち、このプログラムを通じて多くの参加教職員の「異なる相手に対する関心」が高まり、「異なる相手に対する知識」が深まり、「国際交流や国際理解に対する関心」が高まったと言えるでしょう。

I-2. このプログラムによってもたらされた意識変容

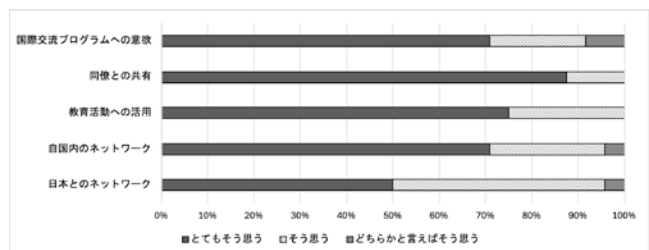
次に、このプログラムが参加者の意識にどのような変化をもたらしただのか（質問13①から⑤）を検討したところ、以下のような傾向が析出されました。



【質問13-①～⑤】（7件法）

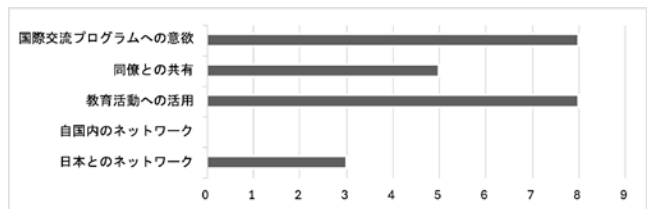
- ①このプログラムを通して、日本の先生たちとのネットワークができた、あるいは広がったと感じる。
- ②このプログラムを通して、自国の先生たちとのネットワークができた、あるいは広がったと感じる。
- ③このプログラムで学んだことを自分の学校の教育活動に応用したい。
- ④この経験を自分の学校の同僚と共有したい。
- ⑤自分の学校で国際交流プログラムを新たに立ち上げたり、促進したりしたい。

【質問13-①～⑤】このプログラムによってもたらされた意識変容



これらの質問は7件法で問われましたが、「どちらとも言えない[4]～全くそう思わない[1]」については選択した対象者がおらず、すべての参加教職員が「とてもそう思う[7]～どちらかと言えばそう思う[5]」のいずれかを選択していました。上図から明らかなように、いずれの質問にも半数以上の参加者が「とてもそう思う」と回答しており、このプログラムが参加者の意識変容に一定の影響を与えたと言えます。さらに、「質問13①から⑤の中で、一番強く思うものはどれですか?」という問いに対して最も回答が多かったのが、「⑤自分の学校で国際交流プログラムを新たに立ち上げたり、促進したりしたい」という「国際交流プログラムへの意欲」と、「③このプログラムで学んだことを自分の学校の教育活動に応用したい」という「教育活動への活用」でした。

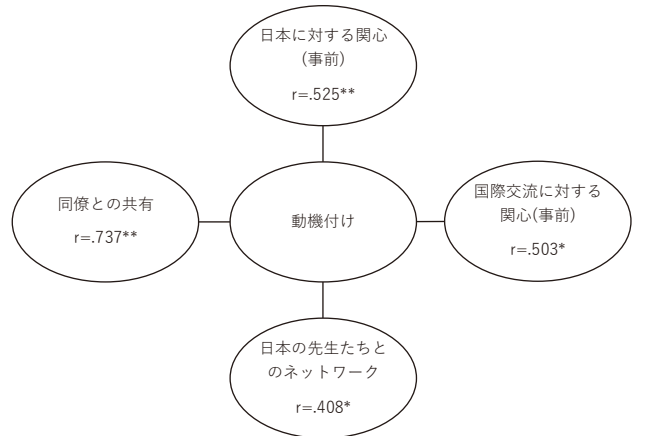
一番強く思うものはどれですか？



この回答結果から、少なくともプログラムの終了時点では、参加者に帰国後の教育活動への動機付けがなされていることが分かります。これらの動機が帰国後に実際に実を結んでいるのか、具体的にどのような教育活動・国際交流プログラムが実現しているのかについては、前のページで紹介している参加者の事後の取組 (p.11-12) や、日韓教職員対談 (p.13-14) をご覧ください。最後の質問「この交流プログラムは継続するべきだと思いますか?」では、参加したすべての教職員が「とてもそう思う・そう思う」と回答しています。

I-3. 参加教職員の動機付けに影響を与えている要因

上記の分析より、参加教職員の多くが、このプログラムを通じて、「国際交流プログラムへの意欲」と「教育活動への活用」を「一番強く」感じていることが明らかになりました。そこで、この二つの変数を合成して「動機付け」という変数を作成し、この変数と他の変数との関係性を分析したところ、以下のような関連が析出されました（相関分析 SPSS ver.29: ** 1%水準、* 5%水準で有意）。



ここから、プログラムで学んだことを帰国後の教育活動や国際交流プログラムに活用したいという動機付けの高い参加者は、もともと「日本に対する関心」や「国際交流に対する関心」が高い傾向があり、同時に、「同僚との共有」に積極的で、「日本の先生たちとのネットワーク」を広げることができたと感じている傾向があることが分かります。「日本に対する関心」や「国際交流に対する関心」が高い傾向は、このようなプログラムに参加する先生方全般に見られる傾向であり、今後もこの傾向が大きく変わることはないと考えられます。一方で、「同僚との共有」や「日本の先生たちとのネットワーク」については、プログラム内の働きかけによって強化することができる変数であると考えられます。相関分析から因果関係を特定することはできませんが、帰国後の動機付けに影響を与え得るこれらの要素を促進するようなプログラムづくりが有効であると言えますそうです。

II. 記述回答による定性評価

令和6年度のプログラムのテーマは「『あたらしい』学びや新時代に求められる教職員像を考える」でした。「あたらしい学び」とはどのようなものなのか、また、「新時代に求められる教職員像」とは何なのか、異なるローカリティをもった教職員が議論を交わす中で、互いの常識や経験の範囲を超えた学びのシナジーが起こり、自分たちの文脈のなかだけでは得られなかった気づきを得て欲しい——これが今年度のテーマの狙いでした。プログラムを終えて、実際にどのような気づきが得られたのか、「あたらしい学び」や「新時代に求められる教職員像」の理解にどのような変化が生じたのか、以下では定性的なデータから読み解いていきます。

分析に使用するデータは、「あたらしい学び」と「新時代に求められる教職員像」に関する参加教職員一人ひとりの言葉です。以下では、彼らの語りからキーワードを抽出した内容分析と、AIテキストマイニングツール(ユーザーローカル <https://wordcloud.userlocal.jp/>)を使用したテキスト分析による分析結果を概説します。

II-1. インドの教職員

プログラム参加前後にインド教職員が考えた「あたらしい学び」や「新時代に求められる教職員像」に含まれるキーワードをまとめたものが図2(P.19)と図3(P.20)です。参加者のプログラム前後の変化を見ながら、インドの先生方が考える「あたらしい学び」のキーワードとして、「学習者による主体的・協働的な学び」や「探究心に基づく学び」が浮かび上がってきました。また、「新時代に求められる教職員像」としては、教職員が継続的に学び、資質能力の向上を目指す姿勢や、社会や子どもたちの状況やニーズに柔軟に対応し、ファシリテーターとして活躍する教職員がポイントとして語られています。

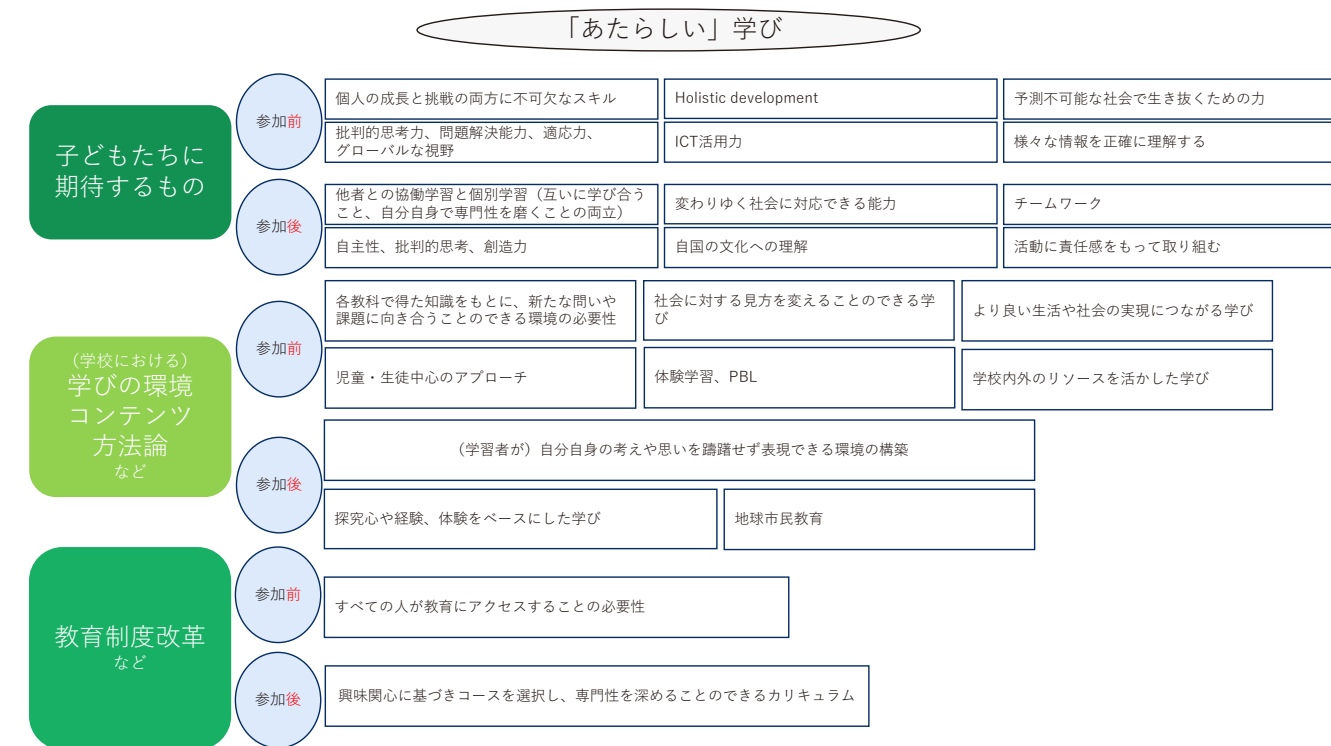
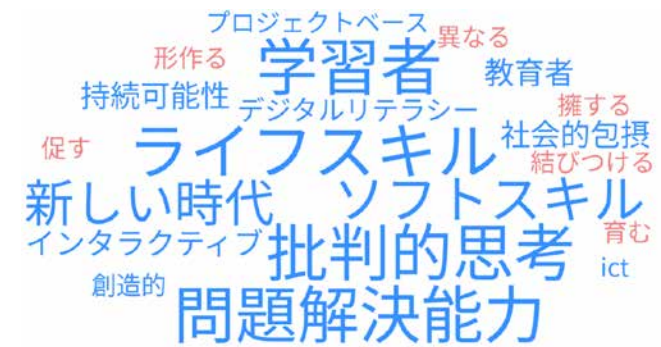


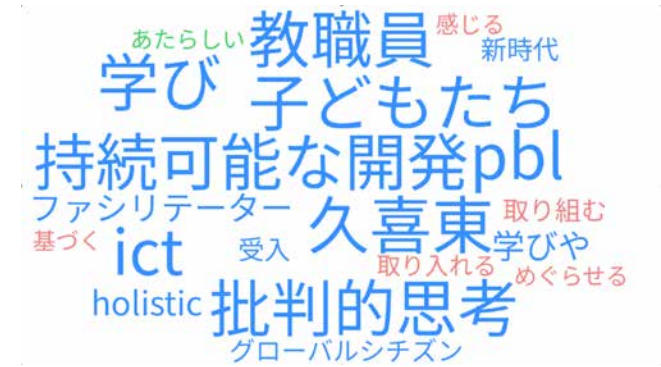
図2 インド教職員が考える「あたらしい」学びのキーワード

インドの先生方の語りをテキストマイニングツールによってワードクラウドにしたものが以下の図です。

【インド_事前】



【インド_事後】



インド教職員の「『あたらしい』学び」や「新時代に求められる教職員像」に対する理解をプログラム前後で比較すると、参加前には「問題解決能力」や「批判的思考」「社会的包摂」といった、インドの国家教育政策に含まれるキーワードが多数あり、「学習者」というワードが「教育者」よりも大きい文字で表れています。一方で、プログラム参加後には「子どもたち」と同じ大きさに「教職員」という言葉が現れており、図3でも紹介した「ファシリテーター」や「グローバルシチズン」など、事前アンケートにはないキーワードが抽出されました。この背景には、日本の受入協力機関における実践に触れ、それらの機関の教職員と交流したことで、「教職員」が求められる役割や使命に対する捉え方が変わり、「グローバルシチズン」としての子どもたちを育むことや、より良い学びを創る「ファシリテーター」として教職員が教育に携わることの重要性を認識したことがあらわれています。

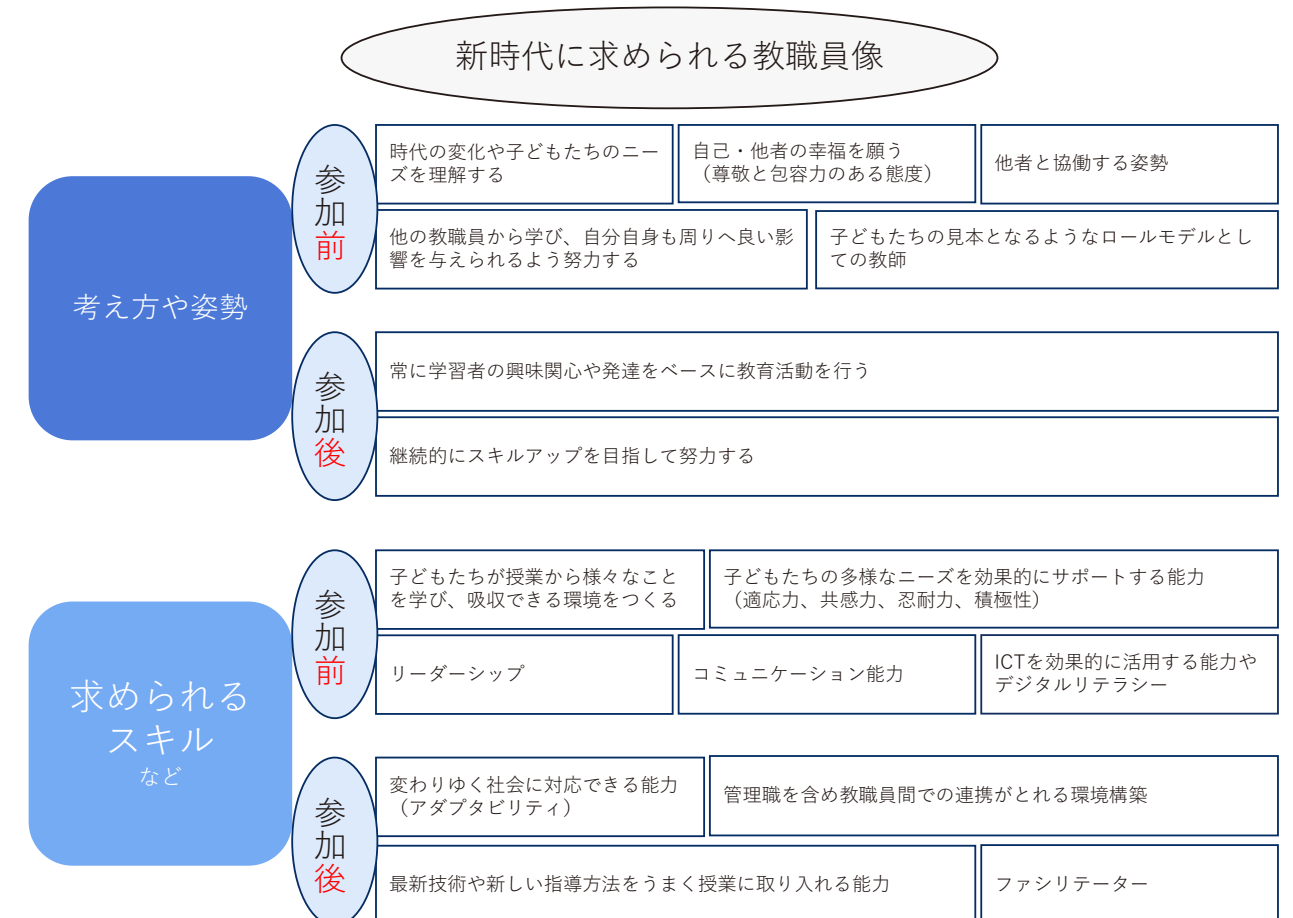
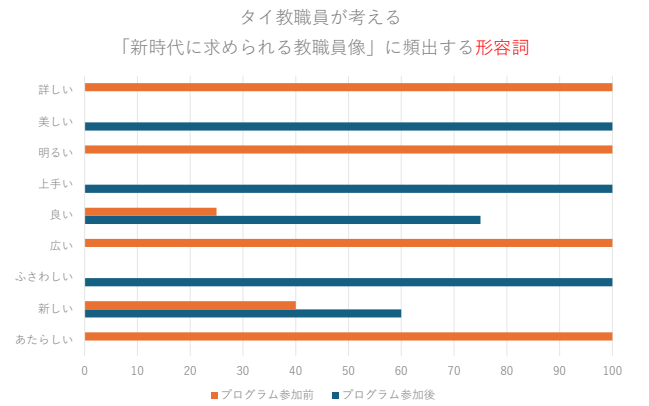
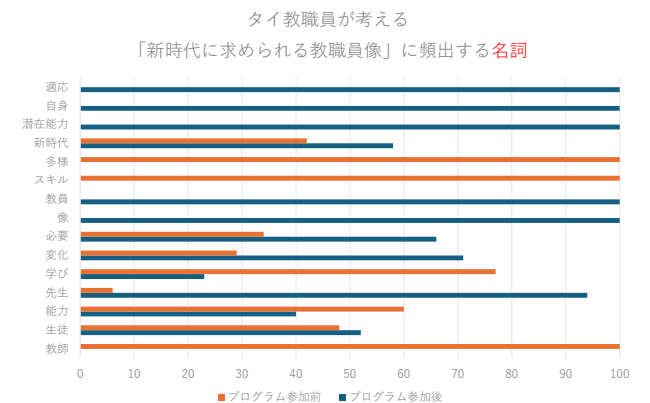


図3 インド教職員が考える「新時代に求められる教職員像」のキーワード

タイの先生方の語りをテキストマイニングツールによってワードクラウドにしたものが以下の図です。タイのケースでは、インドと異なり、「あたらしい学び」と「新時代に求められる教職員像」について別々に回答してもらいました。また、分析文字数の関係上、インドの分析ではできなかった詳細な分析が、タイのデータでは可能になっています。

A word cloud centered around the Japanese character "学び" (learning). The words are arranged in various sizes and colors (blue, green, red, black) against a light blue background. Key terms include "学習" (learning), "教育" (education), "スキル" (skills), "テクノロジー" (technology), "最新技術" (latest technology), "生徒" (students), "教師" (teachers), "生涯学習" (lifelong learning), "新時代" (new era), "多様" (diverse), "役割" (roles), "促進" (promotion), "必要" (necessary), "活用" (utilization), "目指す" (aiming), "行方" (direction), "変化" (change), "取り入れる" (adopting), "目指す" (aiming), "養う" (nurturing), "評価" (evaluation), "実践" (practice), "実証" (evidence), "分析" (analysis), "デジタル" (digital), "引き出す" (drawing out), "教材" (teaching materials), "向上" (improvement), "能力" (abilities), "資質" (qualities), "求める" (seeking), "広い" (wide), "新しい" (new), "思考" (thinking), "続ける" (continuing), "かかわる" (involved), "学習" (learning), "開発" (development), "教授" (professor), "示す" (indicating), "持つ" (having), "できる" (can do), "開く" (opening), "学ぶ" (learning), "統合" (integration), "持続" (sustainability), "創造" (creation), "設計" (design), "授業" (lesson), "明るい" (bright), "詳しい" (detailed), "良い" (good).

[illegible]

「新時代に求められる教職員像」に着目すると、プログラム参加前は、「統合」「評価」「向上」「持続」「デジタル」「最新技術」「開発」などの名詞が多く出現しているのに対し、参加後は「変える」「伝える」「作り出す」「営む」「図る」「引き出せる」「整える」のような動詞がより現れていること、参加前にはなかった「潜在能力」や「手助け」といったワードや「協働」がやや大きくみられるのが特徴的です。タイの先生方が、日本の学校を実際に訪問して、地域の支援員さん・PTA・学校が協働して学校教育や学校運営について議論し、地域・保護者・学校の関わりの中で子どもを育ていくプロセスに参加したことや、全国平均を上回る不登校者率を抱える学校を訪ねて、個々の生徒に対する支援体制を自分の目でリアルに視察したことにより、教職員単体の問題として教職員のあり方を捉えるのではなく、他者とともに子どもに目を向け、手立てを講じながら子どもの成長や発達に関わっていく立場にある者として、教職員像を捉え直す傾向が示されていると考えられます。



以上のアンケート調査や記述回答による定量・定性評価により、本プログラムに参加した教職員の、他者・国際交流及び国際理解に対する関心が高まったことが明らかになりました。この結果から、今年度のプログラムが、参加者の「Change Makersとしての資質」の涵養に寄与したと言えることができます。

子どもたちの探究心や発達に寄り添うことのできる学び
コミュニティ全体での学び
教職員がファシリテーターとなって教育活動を推進すること
社会の変化に対応できるよう教職員そして学習者が生涯
学習に取り組むこと

以上の結果から、本プログラムは、参加者の教育に対する考え方や心構えに変化をもたらすとともに、参加者自らの教育実践や教師としての自分自身を客観的に見つめ直す機会をつくることができ、それによってChange Makersを育成していると考えられます。「あたらしい学び」や「新時代に求められる教職員像」はこれからも様々なコンテキストの中で更新され続けていくことが予想されますが、本プログラムを継続してこのテーマを追求することで、より多くの教職員がChange Makersとなる機会を提供し続けることができると考えられます。今回の調査・分析で明らかになったことを、本プログラムの質向上にむけて活用し、来年度以降のプログラムの改善に努めながら、このプログラムを継続的に実施することで、「多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に貢献する」ことが期待されます。

#	質問項目
1.	お名前
2.	所属機関名
3.	なぜこのプログラムに参加しようと思ったのですか？ 選択肢：日本との交流に関心があったから／国際交流全般に関心があったから／活動内容・テーマに関心があったから／過去の参加者やその他関係者に勧められたから／その他
4.	上記の質問で「その他」を選んだ方は具体的にご説明ください。
5.	プログラムに参加した感想を教えてください。（自由記述）
6.	一番印象的だった（良かったと感じる）活動を教えてください。（自由記述）
7.	このプログラムに参加する前、日本についてどれくらい関心をお持ちでしたか？ 選択肢：とても強い関心／強い関心／まあまあ強い関心／どちらとも言いえない／まあまあ弱い関心／弱い関心／とても弱い関心
8.	このプログラムに参加した後の現在、日本についてどれくらい関心をお持ちですか？ 選択肢：とても強い関心／強い関心／まあまあ強い関心／どちらとも言いえない／まあまあ弱い関心／弱い関心／とても弱い関心
9.	このプログラムに参加する前、日本の教育についてどれくらいのことをご存知でしたか？（参加前） 選択肢：とてもよく知っていた／ある程度知っていた／どちらとも言いえない／あまり知らなかった／全く知らなかった
10.	このプログラムに参加した後の現在、日本の教育についてどれくらいのことをご存知ですか？ 選択肢：とてもよく知っている／ある程度知っている／どちらとも言いえない／あまり知らない／全く知らない
11.	このプログラムに参加する前、国際交流や国際理解についてどれくらい関心をお持ちでしたか？ 選択肢：とても強い関心／強い関心／まあまあ強い関心／どちらとも言いえない／まあまあ弱い関心／弱い関心／とても弱い関心
12.	このプログラムに参加した後の現在、国際交流や国際理解についてどれくらい関心をお持ちですか？ 選択肢：とても強い関心／強い関心／まあまあ強い関心／どちらとも言いえない／まあまあ弱い関心／弱い関心／とても弱い関心
13.	以下の記述についてどう思いますか？ 13-① このプログラムを通して、日本の先生たちとのネットワークができた、あるいは広がったと感じる。 選択肢：とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言いえない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない 13-② このプログラムを通して、自国の先生たちとのネットワークができた、あるいは広がったと感じる。 選択肢：とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言いえない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない 13-③ このプログラムで学んだことを自分の学校の教育活動に応用したい。 選択肢：とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言いえない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない 13-④ この経験を自分の学校の同僚と共有したい。 選択肢：とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言いえない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない 13-⑤ 自分の学校で国際交流プログラムを新たに立ち上げたり、促進したりしたい。 選択肢：とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言いえない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない
14.	13-①から⑤の中で、一番強く思うものはどれですか？ ① / ② / ③ / ④ / ⑤
15.	この交流プログラムは継続するべきだと思いますか？ 選択肢：とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言いえない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない



1. 日本教職員派遣プログラム

韓国政府日本教職員招へいプログラム

〈概要〉

日本教職員を韓国に派遣する本プログラムは、2003年から文部科学省および国際連合大学の協力のもとで実施されてきました。その後、2005年からは韓国教育部の協力を得て、韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）による「ユネスコ日韓教職員対話プログラム」の一環として行われています。令和6年度のプログラムでは、日韓教職員間の友好及び相互理解推進によるネットワーク構築に加え、持続可能な開発のための教育（ESD: Education for Sustainable Development）、地球市民教育（GCED: Global Citizenship Education）、日韓両国が抱える教育分野における課題に関する意見交換や対話の促進を目指し、以下の日程で開催されました。

Day	日付	活動	開催地・開催形態
1	6月14日 (金)	韓国ユネスコ国内委員会主催のオリエンテーション (韓国の教育制度・主要課題についての講義など)	オンライン
2	6月29日 (土)	ACCU主催のオリエンテーション ・韓国の教育事情についての講義など 講義者：文部科学省 総合教育政策局参事官（調査企画担当）付 外国調査係 田中 光晴 氏	オンライン
3	7月8日 (月)	出発前オリエンテーション	千葉県
4	7月9日 (火)	・出国（成田国際空港→金海国際空港） ・開会式、歓迎晩餐会	慶尚南道
5	7月10日 (水)	【Aグループ】 チルウォン高校訪問、ホームビジット 【Bグループ】 金海外国語高校訪問、ホームビジット	慶尚南道
6	7月11日 (木)	【Aグループ】ミルジュ小学校、慶尚南道教育庁 ウポ生態教育院訪問 【Bグループ】チジョン小学校、慶尚南道教育庁、未来教育院、慶尚南道ウィリョン教育支援庁訪問	慶尚南道

Day	日付	活動	開催地・開催形態
7	7月12日 (金)	【Aグループ】 知恵の海図書館、幸せ村学校、チャンウォン芸術学校、チャンウォン自由学校訪問 【Bグループ】 釜山ソンウ学校訪問 【A・Bグループ共通】 ・釜山文化財団 朝鮮通信使歴史館訪問 ・[ワークショップ] 講演及び日韓教職員の共同活動（1） ・晩餐会	慶尚南道 釜山
8	7月13日 (土)	・[ワークショップ] 講演及び日韓教職員の共同活動（2） ・日韓教職員交流会	釜山
9	7月14日 (日)	帰国（金海国際空港→成田国際空港）	千葉県
10	8月24日 (金)	フォローアップミーティング①	オンライン
11	2025年 1月11日 (土)	フォローアップミーティング②	オンライン

参加者リスト

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
増田 恵津子	明石市立魚住東中学校	校長
阿部 みどり	杉並区立杉森中学校	音楽
村井 悟志	東京都立足立西高等学校	保健体育
檀山 光博	目黒区立菅刈小学校	事務主任
神保 智美	新潟県立国際情報高等学校	英語
山本 正太	神戸市立横尾小学校	理科
三原 忠	開智中学・高等学校	英語、地歴公民
高木 慶子	横浜市立横浜総合高等学校	商業科
上田 沙也加	奈良県立山辺高等学校	国語
大貫 一枝	日光市立藤原中学校	学校事務
久原 巳季	愛知県立昭和高等学校	理科（化学）
渡邊 由衣	延岡市立黒岩小学校	全教科
圓山 裕史	奈良市立伏見小学校	理科

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
浦川 伸子	長崎県立長崎東高校	国語
アフリディ マシャール	名古屋大学教育学部附属 中・高等学校	保健体育
町田 登志子	千葉県立松戸国際高等学校	美術
唐木澤 瞳	長野県中野西高等学校	英語
坂本 交司	奈良教育大学附属中学校	英語
氏田 洵悠	大分県立大分上野丘高等学校	地理
今関 雄太	渋谷教育学園幕張中学校高等学校	保健体育
富山 玲	武田中学校 武田高等学校	英語
小西 智子	日本体育大学柏高等学校	英語
宇津野 志保	神奈川県立新栄高等学校	英語
室岡 優輔	文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 教員免許・研修企画室 法規係	
蓮見 詩保子	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	
田邊 智子	八千代市立西高津小学校	音楽
上田 敏廣	稲城市立若葉台小学校	校長
井越 規之	東京都町田市立武蔵岡中学校	保健体育
東 敬祐	実践女子学園中学校高等学校	美術
小宮山 裕美子	長野市立長野高等学校	英語
阪口 菜津子	東京都立小平特別支援学校 武蔵分教室	中高英語、小学校全教科
丸山 妙子	長野県長野盲学校	教頭
松村 孝幸	多摩市立多摩永山中学校	理科
廣瀬 龍太郎	神戸市立いぶき明生支援学校	職業
橋爪 伸幸	関西創価中学校	英語
石橋 佳奈	福山市立山手小学校	国語・算数・社会・道徳・総合・自立活動
青田 祐子	京都府立西乙訓高等学校	英語
静 詩葉	恵泉女学園中学・高等学校	数学
鈴木 あかね	兵庫県立舞子高等学校	地理公民
亀山 勇	桜美林中学校・高等学校	理科
木内 美穂	東洋女子高等学校	教頭
四方田 実希	八千代市立大和田中学校	社会科
牛坂 留都	埼玉県立常盤高等学校	母性看護
西田 朋加	さいたま市立慈恩寺中学校	グローバル・スタディ（英語）
土谷 沙織	千葉市立轟町中学校	音楽
鈴木 知美	横浜市立幸ヶ谷小学校	全教科
高田 一磨	神奈川県立厚木西高等学校	英語
栗林 正	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	
金子 千尋	文部科学省 初等中等教育局 学校デジタル化プロジェクトチーム学校デジタル化総括係	
田代 成香	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	

中国政府日本教職員招へいプログラム

〈概要〉

日本と中国との間の国際交流事業は、2002年に中国から初等中等教職員を招へいたことを契機に、2003年からはさらなる交流を促進するため、日本の初等中等教育教職員が中国を訪問するプログラムを実施してきました。令和6年度は中国教育部の協力のもと、以下の日程にてプログラムが実施されました。

Day	日付	活動	開催地・開催形態
1	11月15日 (金)	オリエンテーション ・中国の教育事情についての講義など 講義者：文部科学省 総合教育政策局調査企画課 外国調査第二係長 新井 聡 氏	オンライン
2	11月24日 (日)	出発前オリエンテーション	東京都
3	11月25日 (月)	・出国（羽田空港→北京首都国際空港） ・前門大街見学 ・歓迎会	北京市
4	11月26日 (火)	・中国教育部表敬訪問 ・北京景山学校大興実験学校訪問 ・天壇見学	北京市
5	11月27日 (水)	・北京首都国際空港→西安咸陽国際空港 ・西安市教育局表敬訪問 ・西安電子科学技術大学訪問	西安市
6	11月28日 (木)	・西安交通大学附属中学校（曲江キャンパス）訪問 ・兵馬俑博物館見学 ・舞台劇鑑賞『西安千古情』	西安市
7	11月29日 (金)	・西安市第三中学校訪問 ・西安咸陽国際空港→北京首都国際空港 ・閉会式	西安市
8	11月30日 (土)	帰国（北京首都国際空港→羽田空港）	東京都
9	12月13日 (金)	フォローアップミーティング	オンライン

参加者リスト

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
大西 浩之	日野市立日野第七小学校	校長
的場 秀騎	呉市立蒲刈小学校	教頭
青木 朋恵	埼玉県立越谷北高等学校	英語
青野 遼	軽井沢町立軽井沢西部小学校	全教科
井上 篤	宮崎県立日南高等学校	美術
大塚 親子	大垣市立西小学校	多文化共生教育（外国人児童生徒指導）
金子 綱基	甲府市立大國小学校	小学校全教科/特別支援学級

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
小林 翔太	調布市立第一小学校	英語
下井 慈	阿智村立阿智中学校	国語
陣野 俊彦	東京都立桜修館中等教育学校	英語
高橋 謙介	山形県立小国高等学校	地歴公民
田中 哲也	白山市立明光小学校	全教科
東郷 尚子	私立水戸啓明高等学校	地歴
長瀬 基延	江南市立布袋中学校	教頭
長野 恭史	岩手県釜石市立双葉小学校	総合的な学習の時間
西條 翼	久喜市立菖蒲中学校	英語
西村 安里子	愛知県立明和高等学校	英語
萩原 英輝	町田市立町田第四小学校	全教科
長谷川 裕	愛知県立東海樟風高等学校	商業、情報
畠山 尚之	大阪教育大学附属高等学校池田校舎	地歴公民
濱田 那月	奄美市立小宿中学校	英語
藤田 万愉子	上芳養中学校	教頭
渡辺 和宏	青梅市立第七小学校	音楽、英語
新井 聡	文部科学省 総合教育政策局参事官 (調査企画担当) 付外国調査第二係	
山本 美来	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	

タイ政府日本教職員招へいプログラム

〈概要〉

2017年に行われた日タイの教育大臣による会談においてタイ政府による日本教職員の受入れが提案されたことを契機に、2018年に「第1回タイ政府日本教職員招へいプログラム」が実施されました。その後もオンラインと対面の両形式で交流を続け、令和6年度もタイ教育省協力のもと、ACCUの掲げる「『あたらしい』学び」や「新時代に求められる教職員像」と重なる「Educational Transformation for Sustainable Future」のテーマで、下記の日程にてプログラムが開催されました。

Day	日付	活動	開催地・開催形態
1	2025年 2月9日 (日)	オリエンテーション ・タイの教育事情についての講義など 講義者： 広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 牧 貴愛 氏	オン ライン
2	2月15日 (土)	出発前オリエンテーション	千葉県
3	2月16日 (日)	・出国(成田国際空港→ドンムアン国際 空港) ・現地オリエンテーション	バンコク

Day	日付	活動	開催地・開催形態
4	2月17日 (月)	・タイ教育省表敬訪問 ・カセサート大学実験学校訪問 ※活動終了後、ナコーンパトム県へ移動	バンコク ナコーン パトム県
5	2月18日 (火)	・ナコーンパトム聾学校訪問 ・プラパトム・ウィッタヤライ学校訪問 ・科学技術人材育成促進プロジェクトセ ンター見学 ・“プラ・パトム・チェディ”訪問	ナコーン パトム県
6	2月19日 (水)	・プッタモントン産業・コミュニティ専門 学校訪問 ・カンチャナピセク非公式教育センター (ロイヤルアカデミー) 訪問 ・タイの職人技研究所訪問	ナコーン パトム県
7	2月20日 (木)	マヒドン・ウィッタヤヌソン学校訪問	ナコーン パトム県
8	2月21日 (金)	※ナコーンパトム県からバンコクへ移動 ・タイ教育省でのプログラム評価会議 ・暁の寺(ワット・アルン) 見学 ・帰国(ドンムアン国際空港→成田国際 空港)	バンコク
9	2月22日 (土)	成田国際空港到着	千葉県

参加者リスト

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
石原 清	板橋区立紅梅小学校	副校長
岡 真夕子	愛知県立明和高等学校	英語
渡辺 大輔	実践女子学園中学校高等学校	数学
野々山 新	愛知県立大府高等学校	世界史
大澤 栄里	竜王町立竜王西小学校	全教科
盛田 彩花	長野県丸子修学館高等学校	外国語(英語)
銅崎 智穂子	小金井市立小金井第二中学校	国語
早稲倉 啓吾	愛知県立東海樟風高等学校	数学
伊藤 妙恵	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	



2. 海外教職員招へいプログラム

韓国教職員招へいプログラム

〈概要〉

日本と韓国の教職員国際交流事業は2001年から始まり、最も長い歴史を有しています。2025年3月現在、2400人以上の韓国の教職員が日本を訪問し、両国の相互理解と友好促進に大きく貢献しています。交流事業の25年という節目の年を迎えた今年度のプログラムでは、オンラインと対面形式を組み合わせ、韓国教職員49名を招へいしました。「Happy Schools」をテーマに、日韓の教職員が共に「『あたらしい』学び」や「新時代に求められる教職員像」について考え、問い直し、新たな学びを協創する機会を提供しました。

Day	日付	活動	開催地・開催形態
1	2025年 1月10日 (金)	オリエンテーション ・日本の教育事情についての講義など 講義者： 文部科学省 初等中等教育局 初等中等教育企画課教育制度改革室 室長補佐 秦 佑輔 氏	オン ライン
2	1月21日 (火)	・出国(金浦国際空港→関西国際空港) ・オリエンテーション ・歓迎夕食会	大阪府
3	1月22日 (水)	【Aグループ】 京田辺市立田辺中学校訪問、ホームビ ジット 【Bグループ】 神戸市立神港橋高等学校訪問	京都府 兵庫県
4	1月23日 (木)	【Aグループ】 王寺町立王寺南義務教育学校訪問 【Bグループ】 ・神戸市立博物館見学 ・沢の鶴資料館見学	奈良県 兵庫県
5	1月24日 (金)	【Aグループ】 王寺町立王寺北義務教育学校訪問 【Bグループ】 明石市立魚住東中学校訪問、ホームビ ジット	奈良県 兵庫県
6	1月25日 (土)	日韓教職員交流会	大阪府
7	1月26日 (日)	帰国(関西国際空港→金浦国際空港)	大阪府
8	2月7日 (金)	フォローアップミーティング	オン ライン

参加者リスト

韓国の先生

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
Seongyul KIM	Korean National Commission for UNESCO	副委員長
Byungil KANG	Busan Sungwoo School	校長
Eunseong GONG	Elementary School affiliated with Seoul National University of Education	全教科
Minhee KIM	Baeksa Elementary School	英語
Serim KIM	Seoul Sindaerim Primary School	全教科
Hyungsoo KIM	Cheongha Middle School	国語
Yukyung NA	Jungwon Girls' Middle School	英語
Kihyuk MOON	Jeju Special Self-Governing Provincial Office of Education	指導主事
Hwa Young PARK	Incheon Byulbit Elementary School	全教科
Jangwon BIN	Seonghwan Elementary School	国語
Jeonghoon OH	Gyeongsangnamdo Office of Education	指導主事
Kijong YOON	Jijeong Elementary School	全教科
Arin LEE	Jinga Elementary School	全教科
Eun Joo LEE	Hansol Middle School	道徳
Jieun LEE	Yeongseon Middle School	英語
Cheolmin LEE	Sindun Primary School	全教科
Yerin JEON	Sammaru Elementary School	全教科
Hakyu JUNG	Changnyeong Daesung High School	校長
Kwangrae JO	Dogae High School	校長
Eunhui JO	Seonhwa Girls' Middle School	英語
Heechang CHAE	Hamchang Middle School	副校長
Ji Won HONG	Haneulbit Middle School	社会
Daeun HWANG	Yeoncheon Elementary School	全教科
Hyun Ju HWANG	Yeouido Middle School	英語
Song KWON	Korean National Commission for UNESCO	専任専門官

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
Gayeon KWON	Gyeseong High School	日本語
Miran KIM	Chungnam Foreign Language High School	英語
Seungchul KIM	Jeonju Shinheung High School	英語
Yongjae KIM	Yeosu Jungang Girls' High School	校長
Inhee KIM	Seoul National School for the Blind	英語
Hyunsook KIM	Janggok High School	英語
Hyoung Kil KIM	Namsung Girls' High School	校長
Donggu RYU	Gyeonggi Management High School	日本語
Dongjoon BYUN	YumKwang High School	英語
Mijin SONG	Seongam International Trade High School	商業(貿易)
Heejin SONG	Incheon Mansu High School	日本語
Youngjae SHIN	Gochangbuk High School	社会
Tongho Yi	Gosaek High School	校長
Sang Hyung LEE	Youngil High School, Seoul	英語
Jihyun LEE	Kyunggi Girls' High School	社会
Hyein JEON	Munsan Sueok High School	総合社会、地理
Jihye JUNG	Affiliated High School to Korea National University of Education	英語
Sangju CHO	TaeReung High School	校長
Kyungsim CHOI	Chilwon High School	社会、政治、法律、経済
Eunsuk CHOI	Gimhae Foreign Language High School	日本語
Junghyun CHOI	Wonhwa Girls' High School	国語
Hyejin HAN	Anhwa High School	国語
Seon Mee HONG	Sangmyung High School	英語
Hyunsook SEO	Korean National Commission for UNESCO	知的連帯本部長



氏名	所属先	担当教科/役職/部署
阪口 菜津子	東京都立小平特別支援学校武蔵分教室	教諭
増田 恵津子	明石市立魚住東中学校	校長
原 さや香	明石市立明石小学校	養護教諭
高田 一磨	神奈川県立厚木西高等学校	教諭
唐木澤 瞳	長野県中野西高等学校	教諭
青田 祐子	京都府立西乙訓高等学校	教諭
上田 沙也加	奈良県立山辺高等学校	教諭
浦川 伸子	長崎県立長崎東高校	教諭
山田 真理	明石市立高丘東小学校	養護教諭
廣瀬 龍太郎	神戸市立いぶき明生支援学校	教諭
圓山 裕史	奈良市立伏見小学校	教諭
土谷 沙織	千葉市立轟町中学校	教諭
小西 智子	日本体育大学柏高等学校	教諭
丸山 妙子	長野県長野盲学校	教頭
鈴木 知美	横浜市立幸ヶ谷小学校	教諭
石橋 佳奈	福山市立山手小学校	教諭
富山 玲	武田中学校 武田高等学校	教諭
榛澤 美華子	兵庫県立西宮甲山高等学校	教諭
高田 慎太郎	佼成学園女子中学高等学校	教諭
勝村 真司	大阪府教育委員会	教諭
竹島 潤	岡山市立操南中学校	教諭
浅見 友記夫	大阪市立加美中学校	教諭
山田 梨絵	大阪府枚方市立山田東小学校	教諭
下井 慈	阿智村立阿智中学校	教諭
寺下 浩徳	大阪府立泉北高等支援学校	教諭
小林 唯子	堺市立浜寺中学校	教諭
山口 智恵	兵庫県立吉川高等学校	教諭
石隈 亮子	長崎県長崎市立土井首中学校	教諭
田井 香織	浪速高等学校	教諭
阿部 みどり	杉並区立杉森中学校	教諭
野本 克磨	明石市立魚住東中学校	教諭
樋口 勝政	神戸市立神港橘高等学校	教諭



中国教職員招へいプログラム

〈概要〉

日本と中国との間の国際交流事業は、2002年から中国から初等中等教職員を招へいし、2003年からはさらなる交流を促進するため、日本の初等中等教育教職員が中国を訪問するプログラムを実施してきました。令和6年度は、文部科学省、中国教育部、中華人民共和国駐日本国大使館、中国教育国際交流協会、及び受入協力機関の協力により、中華人民共和国から初等中等教職員25名をオンラインと対面の両形式で招へいしました。

Day	日付	活動	開催地・開催形態
1	12月10日(火)	オリエンテーション ・日本の教育事情についての講義など 講義者：文部科学省 大臣官房国際課 国際協力企画室室長補佐 重田 佑樹 氏	オンライン
2	12月17日(火)	・出国(北京首都国際空港→羽田空港) ・歓迎交流会	東京都
3	12月18日(水)	八潮市立八條中学校訪問	埼玉県
4	12月19日(木)	神栖市立息栖小学校訪問	茨城県
5	12月20日(金)	・中華人民共和国駐日本国大使館(教育処)表敬訪問 ・文部科学省表敬訪問	東京都
6	12月21日(土)	日中教職員交流会	東京都
7	12月22日(日)	帰国(羽田空港→北京首都国際空港)	東京都
8	12月26日(木)	フォローアップミーティング	オンライン

参加者リスト

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
田 間	四川省成都市石室中学	化学
董 洪彬	中華人民共和国教育部 基礎教育司	特殊教育と教学管理処副処長
張 瓊瓊	中国教育国際交流協会	基礎教育合作部部長
魏 華	天津外国語大学附属 外国語学校	校長
呉 燕	四川省宜賓市第三中学校 (宜賓三江中学)	校長

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
王 偉	天津市和平区教育局	副局長
王 然	天津市滨海新区塘沽紫雲中学	副校長
孫 吉旺	天津市覚民中学	副校長
周 瑩	天津市河西区中心小学	副校長
李 艷艷	天津市和平区教育局	小学教育科科长
胡 娟	天津市河東区教育局	中小学教育科科长
張 喆	天津市耀華中学	思想政治
許 艷艷	天津市第七中学	国語
劉 娜	天津市第五十四中学	歴史
徐 麗華	天津市河東区実験小学校	国語
羅 杉杉	四川省教育厅	対外交流と合作処副処長
蔡 娟	四川省広安友誼中学	副校長
馮 冲	四川省隣水中学	副校長
曾 璿	四川省宜賓市第一中学校	副校長
何 穎恵	成都市草堂小学校	副校長
楊 琳	成都市塩道街小学通桂キャンパス	執行校長
秦 暕	四川省成都市第七中学	コンピューター
王 勇	成都市石室聯合中学	数学
周 麗斯	眉山市東坡区齐通初級中学校	道德と法治
莫 丹	眉山市第一小学校	心理健康教育

日本の先生

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
黄 山泉	西東京市立明保中学校	数学
澤田 隆視	埼玉県立岩槻はるかぜ特別支援学校	日常生活の指導や自立活動など
木村 俊介	愛知県立名古屋聾学校	理科
渡辺 和宏	青梅市立第七小学校	音楽、英語
大西 浩之	東京都日野市立日野第七小学校	校長
福田 勇人	本庄市立本庄東小学校	教諭
富山 正美	茨城県立並木中等教育学校	英語
小林 翔太	東京都調布市立第一小学校	英語

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
根岸 一成	宮城県塩釜高等学校	校長
青野 遼	軽井沢町立軽井沢西部小学校	全科
村上 香織	八王子市立由井第三小学校	主任教諭
陣野 俊彦	東京都立桜修館中等教育学校	英語
萩原 英輝	町田市立町田第四小学校	全科
小川 貴也	実践女子学園中学校高等学校	国語
大川 沙織	立命館宇治中学校・高等学校	社会科/ 地歴、公民
東郷 尚子	私立水戸啓明高等学校	地歴
金子 綱基	甲府市立大国小学校	特別支援
波多野 公恵	新潟県立津南中等教育学校	数学
高橋 晋一	埼玉県立越谷北高等学校	英語

タイ教職員招へいプログラム

〈概要〉

2015年度にタイ教職員を日本に招へいするプログラムが開始されて以来、タイ教職員が日本を訪問し、教職員や児童生徒との交流を深めてきました。コロナ禍においてもオンライン交流を続け、第10回となる今年度は、事業のテーマである『『あたらしい』学び』や「新時代に求められる教職員像」の視点から、「異文化を通して学ぶ」・『『出会い』から学ぶ』ことを通して、これからの学びの在り方を考え・問い直し、新たな学びを協創する接点となる機会を提供しました。

Day	日付	活動	開催地・開催形態
1	10月26日(土)	オリエンテーション ・日本の教育事情についての講義など 講義者：文部科学省 大臣官房国際課 専門職 堀越 優行 氏	オンライン
2	11月2日(土)	「日タイ教育交流会」に参加する日本教職員対象オリエンテーション	オンライン
3	11月5日(火)	・出国(スワンナプーム国際空港→福岡空港) ・博多駅から福山駅へ移動 ・オリエンテーション	福岡県・広島県
4	11月6日(水)	福山市立蔵王小学校訪問①	広島県
5	11月7日(木)	福山市立蔵王小学校訪問②	広島県
6	11月8日(金)	・呉市立仁方中学校訪問 ・大和ミュージアム見学 ・呉市教育委員会訪問	広島県

Day	日付	活動	開催地・開催形態
7	11月9日(土)	日タイ教育交流会	広島県
8	11月10日(日)	・リフレクション ・平和記念公園(原爆ドーム、広島平和記念資料館)見学 ・広島駅から博多駅へ移動	福岡県・広島県
9	11月11日(月)	帰国(福岡空港→スワンナプーム国際空港)	福岡県
10	2025年3月1日(土)	リフレクション・フォローアップ	オンライン

参加者リスト

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
Sammanakan BOONRUANG	Regional Education Office No.13, Ministry of Education	教育局 副局長
Kumpon CHAINUNT	Mechai Bamboo School	校長
Wichian CHAIYABANG	Lamplaimat Pattana school	校長
Jet JARIYANUSORN	Buriram Pittayakom School	日本語、英語
Hataikan PRAPHOTHING	Banthapmakham School	社会
Adchadaporn JAIYAI	Sirindhorn School	日本語
Atitaya PHILAIKUL	Satrichaiyaphum School	英語
Makaporn KHANPLOO	Kanlayanawat School	日本語
Pipatsak CHAIYAWONG	Anukoolnaree School	コンピューターサイエンス
Pornchai SUWAN	Khonburi School	英語
Wimon LUMPIGANONTH	Bureau of International Cooperation, Ministry of Education	部長
Sarinapat DHAMABUS	Thai National Commission for UNESCO, Ministry of Education	シニアプログラムオフィサー

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
石隈 亮子	長崎県長崎市立土井首中学校	英語
石橋 佳奈	福山市立山手小学校	国語・算数・社会・道徳・自立活動
加嶋 千笑	稲城市立稲城第二小学校	自立活動
藤田 有記	東広島市立木谷小学校	教頭
浅野 智宏	岡山市立大野小学校	教頭

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
山崎 由里佳	岡山市立津島小学校	全教科
渡辺 大輔	実践女子学園中学校高等学校	数学
加藤 智威	武田中学校 武田高等学校	理科
大塚 乃瑛	武田中学校 武田高等学校	外国語(英語)
奥本 晴美	武田中学校 武田高等学校	家庭科
坂本 幸司	広島県立黒瀬特別支援学校	教頭
後藤 了允	西都市立穂北小学校	理科

インド教職員招へいプログラム

〈概要〉

日本とインドとの間の国際交流事業は、2016年から「インド教職員招へいプログラム」として文部科学省、インド連邦政府教育省(MoE)、インド環境教育センター(CEE)の協力のもとで始まりました。今年度は、インドから初等中等教職員、及び教育行政職員12名をオンラインと対面の両形式で招へいしました。

Day	日付	活動	開催地・開催形態
1	9月24日(火)	オリエンテーション ・日本の教育事情についての講義など 講義者：文部科学省 大臣官房国際課 専門職 堀越 優行 氏	オンライン
2	9月30日(月)	出国(インディラ・ガンディー国際空港→羽田空港)	東京都
3	10月1日(火)	・日本到着 ・オリエンテーション ・東京都庁見学	東京都
4	10月2日(水)	埼玉県立越谷北高等学校訪問	埼玉県
5	10月3日(木)	学校法人東京内野学園東京ゆりかご幼稚園訪問	東京都
6	10月4日(金)	久喜市立久喜東小学校訪問	埼玉県
7	10月5日(土)	日印教職員交流会	東京都
8	10月6日(日)	帰国(羽田空港→インディラ・ガンディー国際空港)	東京都
9	10月11日(金)	フォローアップミーティング①	オンライン
10	12月23日(月)	フォローアップミーティング②	オンライン

参加者リスト

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
Neeraj Kumar PAL	Centre for Environment Education	Programme Coordinator
Archana BHATNAGAR	Centre for Environment Education	Sr. Programme Coordinator
Anamika DWIVEDI	Upper Primary School Matariya, Hasanganj, Unnao UP.	理科、数学、Environmental Science
Anjali KUMAR	Delhi Public School, Bengaluru East	生物
Manoj Kumar VARSHNEY	District Institute of Education and Training Agra	理科
Avijit BANDYOPADHYAY	Vidyagyan Leadership Academy, Sitapur	地理
Meenakshi KHUSHU	Shree Vasishtha Vidhyalaya	理科
Nikhath BANU	Delhi Public School- Mahendra Hills	化学
Renuka RAWAT	ASN Senior Secondary School	理科、Environmental Science
Shiksha MISHRA	City Montessori School, Gomti Nagar Campus 1	地理
Siddhartha CHAKRABARTI	Lee Collins High School (HS). Kolkata	物理、数学、Environmental Studies
Tanusree GOSWAMI	Nawabganj Balika Vidyalaya	数学、理科

氏名	所属先	担当教科/役職/部署
柴田 浩行	横浜市立青葉台小学校	教諭(特別支援教室)
三上 茉莉	慶應義塾幼稚舎	英語
松井 市子	新潟県立新潟高等学校	教諭
竹内 舞	藤沢市立第一中学校	教諭
広井 真理子	高森台中学校	教諭
高橋 晋一	埼玉県立越谷北高等学校	英語
檀山 光博	目黒区立菅刈小学校	事務主任
澤田 隆視	埼玉県立岩槻はるかぜ特別支援学校	日常生活の指導や自立活動など
村上 香織	八王子市立由井第三小学校	主任教諭
田部井 淳	東京都立川市立第八小学校	主幹教諭
中川 未来	埼玉県立春日部高等学校	英語
青木 朋恵	埼玉県立越谷北高等学校	英語



令和6年度プログラム協力機関・協力者
(敬称略)

●韓国教職員招へいプログラム

明石市立魚住東中学校 校長 増田 恵津子
王寺町教育委員会 教育長 中野 衛
王寺町立王寺北義務教育学校 校長 荒木 篤人
王寺町立王寺南義務教育学校 校長 眞方 武志
京田辺市立田辺中学校 校長 中井 達
神戸市立神港橘高等学校 校長 清家 豊
All HEROs 合同会社 代表 中山 芳一

●中国教職員招へいプログラム

八潮市立八條中学校 校長 檜田 勝巳
神栖市立息栖小学校 校長 長末 正也

●タイ教職員招へいプログラム

福山市立蔵王小学校 校長 福田 裕治
呉市教育委員会 教育長 寺本 有伸
呉市立仁方中学校 校長 柿林 浩彦
広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 牧 貴愛

●インド教職員招へいプログラム

埼玉県立越谷北高等学校 校長 若菜 健一
学校法人東京内野学園東京ゆりかご幼稚園
理事長・園長 内野 彰裕
久喜市立久喜東小学校 校長 富山 司

●韓国政府日本教職員招へいプログラム

文部科学省総合教育政策局参事官(調査企画担当) 付
外国調査係 田中 光晴

●中国政府日本教職員招へいプログラム

文部科学省総合教育政策局調査企画課
外国調査第二係長 新井 聡

●タイ政府日本教職員招へいプログラム

広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 牧 貴愛

プログラム関連機関

●文部科学省

大臣官房国際課長 北山 浩士
大臣官房国際課 国際協力企画室長 水野 俊晃
大臣官房国際課 国際協力企画室 室長補佐 重田 佑樹
大臣官房国際課 企画係長(併)企画調査係長 濱野 怜
大臣官房国際課 国際協力企画室企画調査係 田中 まよ

●海外パートナー機関

韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)
中国教育部
中国教育国際交流協会
タイ教育省
インド教育省
国際NGOインド環境教育センター(CEE)

●海外協力機関

駐日本国大韓民国大使館
駐日タイ王国大使館学生部
中華人民共和国駐日本国大使館 教育処
駐日インド大使館

●プログラムアドバイザー

東洋大学社会学部社会学科 教授 米原 あき

事業実施運営機関

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-32-7F
Tel: 03-5577-2853 Fax: 03-5577-2854
Email: exchange@accu.or.jp
URL: https://www.accu.or.jp

理事長

田村 哲夫

国際教育交流部長

栗林 正

国際教育交流部主任

伊藤 妙恵

国際教育交流部プログラムオフィサー

蓮見 詩保子

国際教育交流部プログラムオフィサー

山本 美来

国際教育交流部プログラムオフィサー

田代 成香

文部科学省委託 令和6年度 新時代の教育のための国際協働プログラム
初等中等教職員国際交流事業実施報告書

2025年3月

編集・発行

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-32-7F 出版クラブビル

電話 03-5577-2853

Email exchange@accu.or.jp

URL https://www.accu.or.jp

本報告書は、文部科学省の委託事業として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが実施した「新時代の教育のための国際協働プログラム(初等中等教職員国際交流事業)」委託事業の成果を取りまとめたものです。従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

© 2025 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)



ACCU
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター



MEXT

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN